

第 63 回 日本西洋史学会大会

全体シンポジウム
自由論題報告
小シンポジウム

プログラム・報告要旨集

2013 年 5 月 11 日(土)・12 日(日)

京都大学

第63回 日本西洋史学会大会

全体シンポジウム
自由論題報告
小シンポジウム

プログラム・報告要旨集

2013年5月11日(土)・12日(日)

京都大学

歴史と事実

ポストモダンの
歴史学批判をこえて

大戸千之 著

〈学術選書〉 1890円

ポストモダン主義の台頭以来、「歴史」とは歴史家が過去についての見たをそれぞれに語った物語にすぎず、過去をそのまま復元したものではないという批判がある。本書は歴史学の原点である古代ギリシアの歴史家の見解を検討し、歴史を書くことの可能性について明らかにする。

ポリュビオス 歴史 全4冊

城江良和 訳

(1)3885円 (2)4095円 (3)4935円 (4)4515円

前2世紀後半アカイア同盟の指導層にあり、ローマに連行されたポリュビオスは、自身の見聞から地中海の覇者ローマの興隆を『歴史』に著した。政体循環と混合政の理論で有名なこの書は、政治的教訓に富んだ実用的歴史学として転換期の世界像をよく伝えている。本邦初訳。完結。

〈西洋古典叢書〉

ヘシオドス 全作品

中務哲郎 訳
4830円

古来、詩聖と仰がれる叙事詩人の真作2篇に加え、本邦初訳の諸作品や全断片に古代の証言をも併録。ヘシオドスのすべてがこの一冊に！
第1回配本 5月10日発売

エウリピデス 悲劇全集 2・3

丹下和彦 訳

ピロストラトス テュアナのアポロニオス伝 2

秦 剛平 訳

ブルタルコス モラリア 10

伊藤昭夫 訳

ブルタルコス他 古代ホメロス論集

内田次信 訳

リウィウス ローマ建国以来の歴史 4

毛利 晶 訳

リバニオス 書簡集 1

田中 創 訳

西洋古典叢書 通巻100冊

2013 [全8冊]

ブリテン問題とヨーロッパ連邦
— フレッチャーと初期啓蒙 村松茂美 著 5250円
スコットランドを拠点に、諸国民の「自由と独立」を唱えた思想家・フレッチャー。従来の「イギリス史に新たな一頁を加える。」

19世紀ドイツの地域産業振興
— 近代化のなかのビュルテンベルク小富業 森良次 著 4620円
大工業経営を保護・育成するプロイセンの殖産興業政策とは異なる、漸進的発展を促す南ドイツの「近代化」を描出する。

東ドイツ農村の社会史
— 「社会主義」経験の歴史化のために 足立芳宏 著 5040円
第二次大戦後東ドイツでの15年間の土地改革と農業集団化の経験を、戦後ドイツ人難民問題に絡めつつミクロ史的に分析。新たな戦後史像の構築を目指す。

中世イタリアの地域と国家
— 紛争と平和の政治社会史 佐藤公美 著 3090円
自治協同体から地域国家へ。都市、共同体、党派が織り成す地域の紛争と平和が広域の秩序を生み出すダイナミズムを析出する。
〈プリミエ・コレクシオン〉

グリッド都市 ス페인植民都市の
起源、形成、変容、転生

布野修司、ヒメネス・ベルデホ・ホアン・ラモン 著 7560円
イベリア本国から東南アジアまでスペイン帝国による植民都市を類型化。都市空間の変容を探る。QRコードを用いたスマートフォン対応コンテンツ付。

大会プログラム

第1日目：5月11日（土）

- * 東/西日本懇談会 11:00~11:30 (文学部校舎2階 第4・5講義室)
- * 理事校会議 11:30~12:00 (文学部校舎地下1階 大会議室)

受付開始 12:00 百周年時計台記念館1階フロア

全体シンポジウム

「東アジアの『西洋史学』 — 国境を越えた対話をめざして —」

13:30~16:30 百周年時計台記念館 1階 百周年記念ホール
(ホールに着席できない場合は、同記念館2階の国際交流ホールIIIで
中継をスクリーンで御覧ください)

基調報告：林志弦

(Lim Jie-Hyun 漢陽大学(ソウル)比較歴史・文化研究所所長)

「世界史 — ナショナル・ヒストリーへの布石 —」

(World History as a Nationalist Rationale)

コメント：小田中直樹(東北大学教授) 佐々木博光(大阪府立大学准教授)
橋本伸也(関西学院大学教授) 長谷川貴彦(北海道大学准教授)
長谷川まゆ帆(東京大学教授)

司会：小山 哲(京都大学教授)

* 総会 16:30~17:00 (百周年時計台記念館 1階 百周年記念ホール)

* 懇親会 18:00~20:00 (百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール)

第2日目：5月12日（日）

受付開始 8:30 文学部校舎2階フロア

部会別自由論題報告

9:30~12:30 百周年時計台記念館 文学部校舎 他

古代史部会1 ————— 文学部校舎1階 第1講義室 9:30~12:30

- 1 根本泰充(東洋大学大学院生)
「前4世紀アテナイの契約における集団の権利・責任
— 金銭貸借・不動産貸借・請負契約における契約主体としての集団 —」
司会：前沢伸行(首都大学東京教授)
- 2 森谷公俊(帝京大学教授)
「イランにおけるアレクサンドロス遠征路の現地調査 — ペルセポリスへの道 —」
司会：長谷川岳男(鎌倉女子大学教授)
- 3 岸本廣大(京都大学大学院生)
「アイトリア連邦における市民権と外交関係」
司会：中井義明(同志社大学教授)
- 4 中尾恭三(大阪経済法科大学非常勤講師)
「前242年コス島の使節団派遣と大アスクレピエイア創出」
司会：師尾晶子(千葉商科大学教授)
- 5 伊藤雅之(東京大学大学院生)
「アンティオコス3世のギリシア進軍
— セレウコス朝の外交とアイトリア指導層の動向 —」
司会：長谷川岳男(鎌倉女子大学教授)

古代史部会2 ————— 文学部校舎 1 階 第2講義室 10:05~12:30

- 1 石田真衣 (大阪大学大学院生)
「プトレマイオス朝エジプトにおける嘆願と和解 —テーベ地方を中心に—」
司会:周藤芳幸(名古屋大学教授)
- 2 本間俊行 (室蘭工業大学非常勤講師)
「五賢帝期ローマ帝国における教養人と都市
—アプレイウス『弁明』に関する一考察—」
司会:阪本 浩(青山学院大学教授)
- 3 池口 守 (久留米大学准教授)
「ポルトゥス築造後のローマへの食糧供給システム」
司会:坂口 明(日本大学教授)
- 4 小坂俊介 (東北大学助手)
「アンミアヌス・マルケリヌス著『歴史』における書記官「鎖」のパウルの記述」
司会:後藤篤子(法政大学教授)

中世史部会 ————— 文学部校舎 2 階 第3講義室 9:30~12:30

- 1 菊地重仁 (東京大学客員研究員)
「カロリング期文書コミュニケーションにおける君主の尊称について」
司会:加納 修(名古屋大学准教授)
- 2 北舘佳史 (中央大学非常勤講師)
「ポンティニー修道院と隣人たち —聖エドム崇敬の展開を中心に—」
司会:舟橋倫子(中央大学非常勤講師)
- 3 横川大輔 (札幌国際大学講師)
「1410年の二重国王選挙と「金印勅書」
—神聖ローマ帝国における「金印勅書」の受容史の一断面—」
司会:皆川 卓(山梨大学准教授)
- 4 濱野敦史 (首都大学東京大学院生)
「中世末期トスカーナにおける賃金労働者の採用活動 —一家の使用人の事例から—」
司会:亀長洋子(学習院大学教授)
- 5 上柿智生 (京都大学大学院生)
「15世紀のギリシア系知識人とオスマン宮廷
—ゲオルギオス・アミルツィスを例に—」
司会:草生久嗣(大阪市立大学講師)

近世史部会1 ————— 文学部校舎 2 階第7講義室 10:05~12:30

- 1 奥田真結子 (専修大学大学院生)
「ピーテル=ブリューゲル絵画に残る社会的結合 (ソシャビリテ) の痕跡」
司会:森田安一(日本女子大学名誉教授)
- 2 加来奈奈 (奈良女子大学大学院生)
「16世紀前半ネーデルラント中央政府の渉外活動
—1529年カンブレ平和条約履行における君主・外国・地方—」
司会:河原 温(首都大学東京教授)
- 3 柏渕直明 (公文国際学園講師)
「有力市民アーニョロ・デ・バルディの遺産分割
—16世紀フィレンツェにおける有力市民の姻族関係—」
司会:石黒盛久(金沢大学教授)
- 4 小林繁子 (上智大学プロジェクトPD)
「近世マインツ選帝侯領における請願とポリツァイ
—魔女裁判の財産没収法令を例に—」
司会:踊 共二(武蔵大学教授)

近世史部会2 ————— 文学部校舎 2 階 第6講義室 9:30~12:30

- 1 岡本 明 (海上保安大学非常勤講師)
「リシュリュー宰相期 (1624~1642) の官職保有者集団」
司会:石井三記(名古屋大学教授)
- 2 武田和久 (秀明大学非常勤講師)
「スコットランドにおける宗教対立と長老教会のジレンマ —革命体制受容の一断面—」
司会:富田理恵(東海学院大学准教授)
- 3 菊池雄太 (早稲田大学大学院生)
「ハンブルク—リューベック—バルト海 —近世におけるハンザ商業路と商品流通—」
司会:斯波照雄(中央大学教授)
- 4 日尾野裕一 (早稲田大学大学院生)
「ブリテンの船舶必需品調達と北米北部植民地政策
—1722年の海軍資材法改正を中心に—」
司会:岩井 淳(静岡大学教授)
- 5 上村敏郎 (筑波大学特任研究員)
「啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるコミュニケーションネットワーク
—いかにしてウィーンで禁書は流通していたのか—」
司会:山之内克子(神戸市外国語大学教授)

近代史部会 1 —————百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール I 9:30~12:30

- 1 田村理 (北海道大学大学院生)
「環大西洋革命」期のイギリス地方都市における急進主義と奴隷解放論
司会:松塚俊三(福岡大学教授)
- 2 清原和之 (九州大学大学院生)
「女性預言者ジョアンナ・サウスコットの「神の子」妊娠
—ナポレオン戦争期イギリスにおけるメディアと信用経済をめぐって—」
司会:坂下 史(東京女子大学教授)
- 3 正木慶介 (エディンバラ大学大学院生)
「ピット・クラブ: トーリ党の全国的政治ネットワークに関する一考察、1808-1832」
司会:青木 康(立教大学教授)
- 4 久保洋一 (同志社大学研究員)
「都市の共同墓地 —19世紀イギリスの死者の共同体に関する考察—」
司会:指 昭博(神戸市外国語大学教授)
- 5 田村俊行 (立教大学大学院生)
「19世紀英国における伝染病法
—議会の論戦に引用される専門家の言葉を手がかりに—」
司会:永島 剛(専修大学准教授)

近代史部会 2 —————百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール II 10:05~12:30

- 1 鹿野美枝 (立教大学大学院生)
「小ピット政権のインド政策に関する一考察
—18世紀末のイギリス正規軍のインド派遣論争をめぐって—」
司会:坂本優一郎(大阪経済大学准教授)
- 2 伊東剛史 (金沢学院大学講師)・高林陽展 (清泉女子大学講師)
「自然誌・医学・帝国統治 —19世紀後半イギリスにおけるコブラ毒の議論をめぐって—」
司会:永島 剛(専修大学准教授)
- 3 北政巳 (創価大学教授)
「ヴィクトリア期英帝国の繁栄とエルギン伯爵一族の歴史
—スコットランド貴族の参画と貢献—」
司会:木畑洋一(成城大学教授)
- 4 和田応樹 (大阪府職員)
「インド総督第4代ミントー伯爵とその妻メアリ
—20世紀初頭インド統治におけるイギリス帝国の貴族—」
司会:本田毅彦(帝京大学准教授)

近代史部会 3 —————百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール III 10:05~12:30

- 1 平松英人 (東京大学研究員)
「19世紀ドイツにおける自由主義と都市救貧事業 —ケルンを例として—」
司会:北村昌史(大阪市立大学教授)
- 2 巽由紀子 (東北大学東北アジア研究センター非常勤研究員)
「近代ロシアの商業出版と評論家 V・V・スターソフ」
司会:高橋一彦(神戸市外国語大学准教授)
- 3 村田奈々子 (法政大学非常勤講師)
「バルカン戦争期の『ヘレニズム』 —ギリシア・ナショナリズムとマケドニア—」
司会:中島崇文(学習院女子大学教授)
- 4 吉野恭一郎 (上智大学科目等履修生)
「第一次世界大戦とジークフリート・クラカウアー」
司会:小野清美(大阪大学教授)

近代史部会 4 —————総合研究3号館 1階 大講義室 10:05~12:30

- 1 櫻井文子 (専修大学講師)
「フランクフルトの「アフリカ」
—19世紀前半のドイツ語圏における自然誌コレクションの有用性—」
司会:藤原辰史(京都大学准教授)
- 2 小暮実徳 (明治大学兼任講師)
「19世紀中葉の欧米列強によるアジア戦略とそのネットワーク形成過程の解明」
司会:林 義勝(明治大学教授)
- 3 鈴木楠緒子 (神奈川大学非常勤講師)
「ドイツ帝国成立期における在華ドイツ系領事館の統廃合問題
—「大南澳開墾阻止事件」(1868—1869年)への対応を例として—」
司会:浅田進史(駒澤大学准教授)
- 4 大井知範 (明治大学助教)
「20世紀初頭の東アジア地域におけるハプスブルク帝国海軍
—ハプスブルク帝国とグローバリゼーション—」
司会:大津留厚(神戸大学教授)

現代史部会 1 ————— 総合研究 2 号館 地階 第 8 講義室 9:30~12:30

- 1 森下嘉之 (日本学術振興会特別研究員 PD)
「戦間期の国家形成における宗派とネーション
—チェコ、ポーランド、ドイツ境界地域を例に—」
司会: 林 忠行 (京都女子大学教授)
- 2 鍋谷郁太郎 (東海大学教授)
「ポスト冷戦期ドイツにおける第一次世界大戦研究と歴史家たち」
司会: 木村靖二 (東京大学名誉教授)
- 3 長沢優子 (東京大学大学院生)
「文化共同体」から「民族共同体」へ?
—ドイツとオーストリアの合邦推進団体による文化事業—」
司会: 松本 彰 (新潟大学教授)
- 4 穴山朝子 (お茶の水女子大学アカデミック・アシスタント)
「ナチ政権下の芸術家 —ある出版社の人的ネットワークを手がかりに—」
司会: 若林美佐知 (東京女子大学非常勤講師)
- 5 岡内一樹 (京都大学大学院生)
「誰がための森林? —西ドイツにおける自然公園とナショナルパーク(1949-1970)—」
司会: 若尾祐司 (名古屋大学名誉教授)

現代史部会 2 ————— 総合研究 2 号館 1 階 経営管理大学院大講義室 9:30~12:30

- 1 山手昌樹 (上智大学特別研究員)
「1930年代イタリアの農村家族調査と農民観」
司会: 北村暁夫 (日本女子大学教授)
- 2 桑島 穂 (大阪市立大学ドクター研究員)
「1940-50年代の植民地アシャンティ (現ガーナ中部) におけるチーフと学校教育
—中等学校プレンペ・カレッジの設置 (1949年) をめぐって—」
司会: 永原陽子 (京都大学教授)
- 3 Pallavi BHATTE (京都大学大学院生)
「アメリカ、イギリス、ドイツにおけるインド独立運動 —ディアスポラの貢献—」
司会: 長崎暢子 (龍谷大学現代インド研究センター センター長)
- 4 藤岡真樹 (京都大学大学院生)
「冷戦初期のアメリカ合衆国の学術世界における「新秩序」の形成」
司会: 中野耕太郎 (大阪大学准教授)
- 5 稲垣健志 (近畿大学非常勤講師)
「1980年代におけるノッティングヒル・カーニバルの体制内化と移民コミュニティ
—カーニバル発展委員会の活動を中心に—」
司会: 小笠原博毅 (神戸大学准教授)

小シンポジウム (1~6)

小シンポジウムの時間は、すべて 13:30~17:00 です。

小シンポジウム 1 ————— 文学部校舎 1 階 第 1・2 講義室

「日本の西洋古代史研究：回顧と展望

—独自性と国際性、貢献をめぐる—」

趣旨説明：南川高志 (京都大学教授)

報告 1：佐藤 昇 (神戸大学准教授)

「日本における古代ギリシア史研究の現在」

報告 2：高橋亮介 (川村学園女子大学講師)

「日本における古代ローマ史研究の現在」

報告 3：藤井 崇 (京都大学助教)

「欧米からみた日本の西洋古代史研究」

報告 4：長谷川岳男 (鎌倉女子大学教授)

「西洋古代史研究の貢献」

コメント：南雲泰輔 (日本学術振興会特別研究員)

「これからの「日本の」西洋古代史研究」

小シンポジウム 2——文学部校舎2階 第3講義室

「中世ヨーロッパにおける政治的コミュニケーションと秩序

—境界地域から—」

趣旨説明：服部良久(京都大学教授)

報告1：朝治啓三(関西大学教授)

「1259年パリ条約以後王子エドワードのボルドー政策

—領有者プランタジネット家と都市コミュニティのコミュニケーション—」

報告2：松本 涼(日本学術振興会特別研究員)

「13世紀アイスランド社会とノルウェー王権 —忠誠と反逆の狭間で—」

報告3：高田良太(駒澤大学講師)

「13、14世紀クレタにおけるヴェネツィア支配とギリシア人

—「反乱」時代の秩序形成—」

報告4：藤井真生(静岡大学准教授)

「中世後期チェコにおける貴族共同体と「外国人」」

小シンポジウム 3——百周年時計台記念館2階 国際交流ホールI

「近世ヨーロッパにおける礫岩国家 —複合する政体、集塊する地域—」

問題提起：近藤和彦(立正大学教授)

「問題提起 —礫岩国家と普遍君主—」

報告1：古谷大輔(大阪大学准教授)

「礫岩国家スウェーデンと多様な地域集塊の論理

—スコーネ地方の併合にみる「バルト海帝国」の形成プロセス—」

報告2：後藤はる美(東洋大学講師)

「「君主のいない共和国」と礫岩国家

—17世紀イングランド・スコットランドの法の合同論をめぐって—」

報告3：中澤達哉(福井大学准教授)

「ハプスブルク帝国の礫岩国家編成と集塊理論

—非常事態への対応：服属地域ハンガリー王国からの正統化—」

報告4：中本 香(大阪大学准教授)

「王朝の交代と礫岩国家スペインの変質

—「新組織王令」にみるブルボン朝スペインの統治理念と実態—」

コメント：内村俊太(上智大学助教)

「近世スペインにおける歴史意識研究の立場から見た礫岩国家研究」

コメント：渋谷 聡(島根大学教授)

「近世神聖ローマ帝国研究の立場から見た複合国家研究」

小シンポジウム 4——百周年時計台記念館2階 国際交流ホール II

「ヨーロッパ近代のなかのカトリシズム

—宗教を通して見るもうひとつの「近代」—」

趣旨説明：中野智世（京都産業大学准教授）

報告1：前田更子（明治大学講師）

「公教育のなかの宗教 —19世紀フランスにおける女性教員の養成をめぐる—」

報告2：尾崎修治（上智大学非常勤講師）

「19世紀末ドイツのカトリック労働運動 —階級と信仰のあいだで—」

報告3：渡邊千秋（青山学院大学教授）

「20世紀前半スペインにおけるカトリック的集合心性を考える

—青年平信徒のプロソポグラフィから—」

コメント1：村上信一郎（神戸市外国語大学教授）

「イタリアにおける国家教会関係史研究とカトリック運動史研究の視点から」

コメント2：深沢克己（東京大学教授）

「『世俗化』史観の再検討 —フランス近世史からの眺望—」

小シンポジウム 5——百周年時計台記念館2階 国際交流ホール III

「市民の自分史 —前世紀転換期から戦間期のエゴドキュメント—」

趣旨説明：槇原 茂（島根大学教授）

報告1：長田浩彰（広島大学教授）

「境界に立つ市民としての矜持と限界

—ユダヤ人家族を持ったアーリア人作家ヨッヘン・クレッパー(1903-1942)—」

報告2：長井伸仁（上智大学准教授）

「世紀転換期フランスにおける聖職者の市民意識と自分史

—ピエール・ダブリ(1864-1916)—」

報告3：寺田由美（北九州市立大学准教授）

「20世紀初頭アメリカ合衆国における女性労働者の組織化

—ローズ・シュナイダーマン(1872-1972)のシティズンシップ観—」

報告4：槇原 茂（島根大学教授）

「『農民』と『市民』のあいだ

—ブルボネの農民、ジュール・ルー・ジュロン(1861-1945)と共同性—」

コメント1：松井康浩（九州大学教授）

「ソ連史の立場から」

コメント2：小田中直樹（東北大学教授）

「『市民の自分史』と歴史学の方法」

「第一次世界大戦再考」

趣旨説明：小関 隆（京都大学准教授）

報告 1：山室信一（京都大学教授）

「「世界性」認識と学知の転回」

報告 2：藤原辰史（京都大学准教授）

「総力戦を生きのびる」

報告 3：岡田暁生（京都大学教授）

「第一次世界大戦と「芸術」の変容」

報告 4：野村真理（金沢大学教授）

「「未完の戦争」東部戦線によせて」

コメント 1：中野耕太郎（大阪大学准教授）

「アメリカ史の視点から」

コメント 2：林田敏子（摂南大学准教授）

「ジェンダーの視点から」

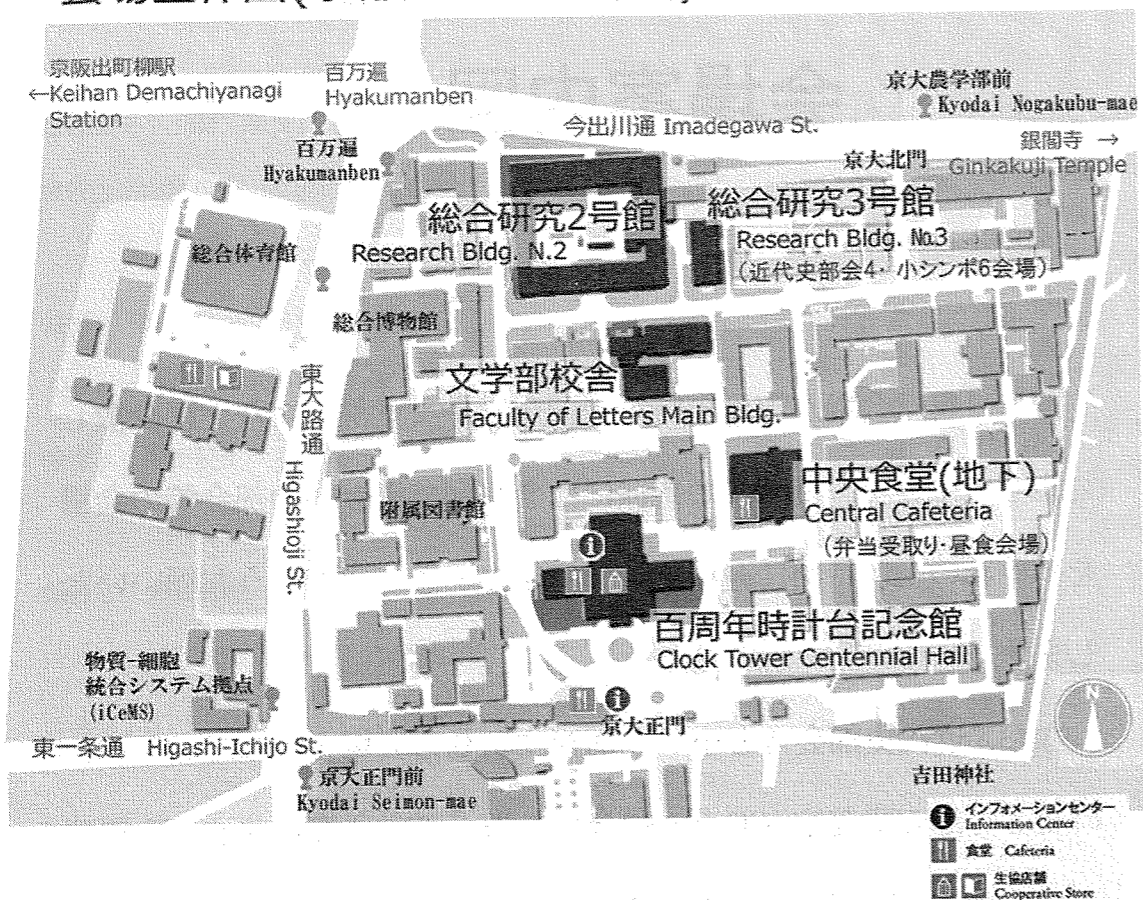
第 63 回日本西洋史学会大会

会場案内図

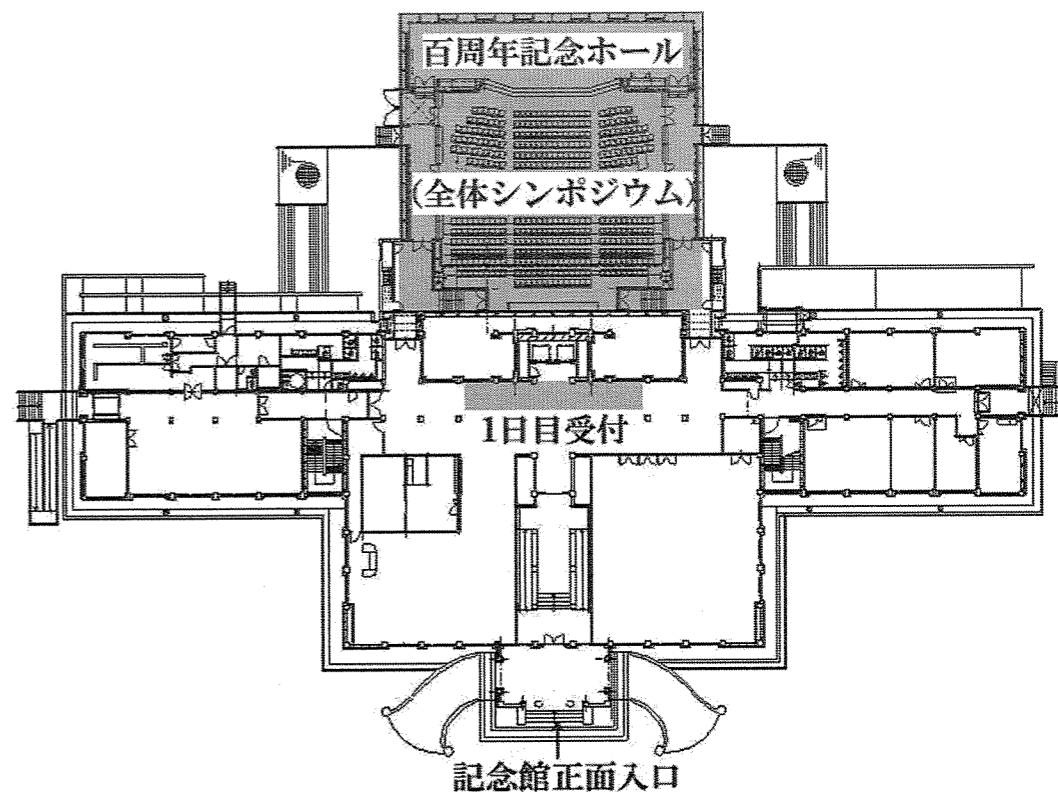
第 2 日目は会場が百周年時計台記念館や文学部校舎などに分散しておりますので、御参加の皆様には会場図で御参加の部会等の会場を御確認の上、時間に遅れぬように参集下さいますようお願いいたします。

なお、近代史部会 4 と小シンポジウム 6 の会場となっている総合研究 3 号館の講義室（旧土木総合館 1 階 工学研究科共通 155 講義室）は、文学部校舎の北東、ごく近いところにあり、建物の南面にある正面入口から入るとすぐの教室です。

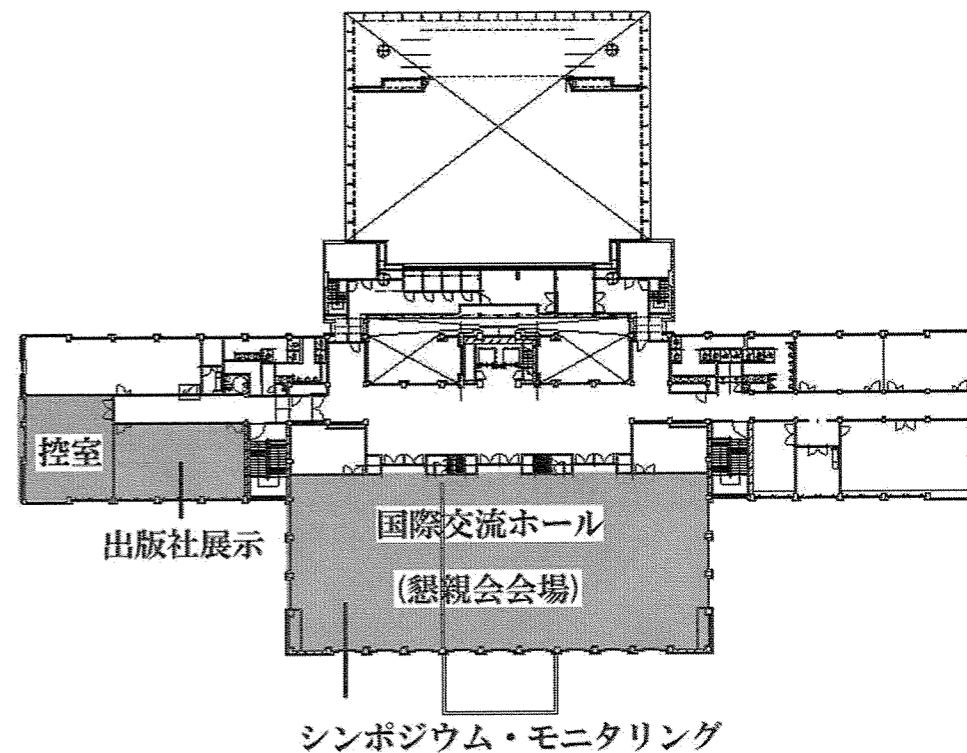
会場全体図(京都大学本部構内)



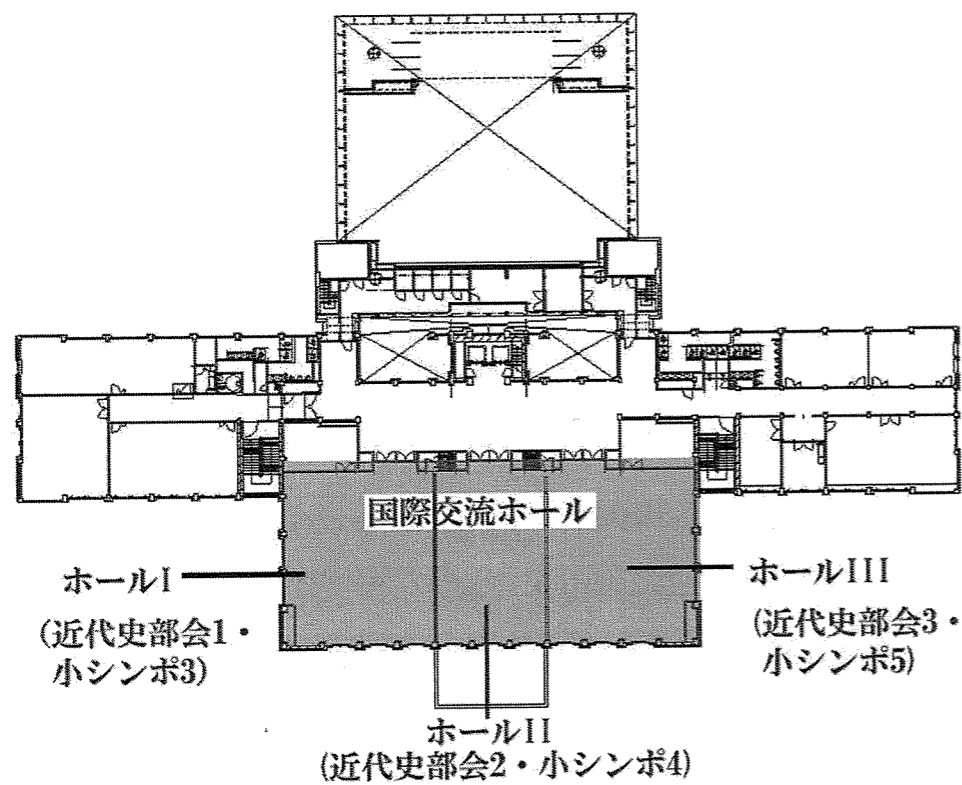
百周年時計台記念館 1階 (5月11日)



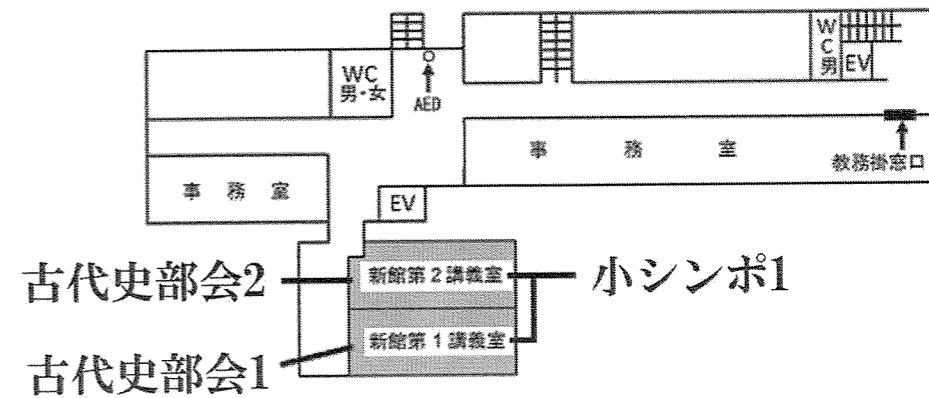
百周年時計台記念館 2階 (5月11日)



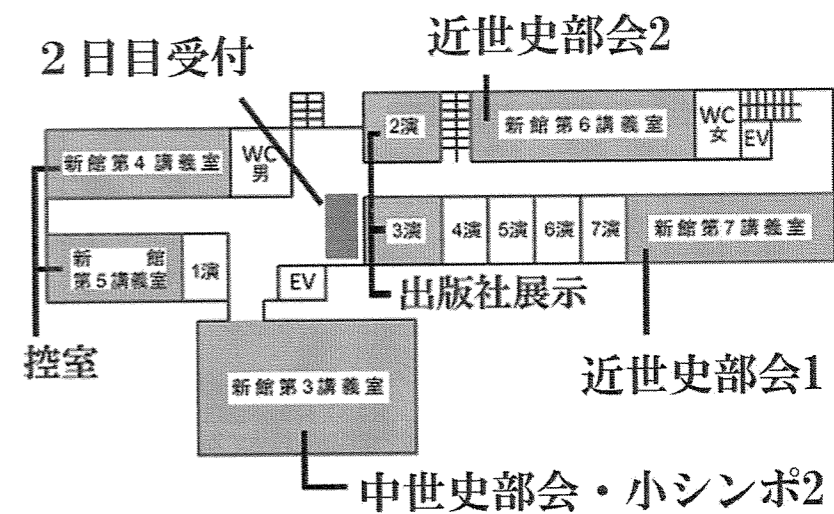
百周年時計台記念館 2階 (5月12日)



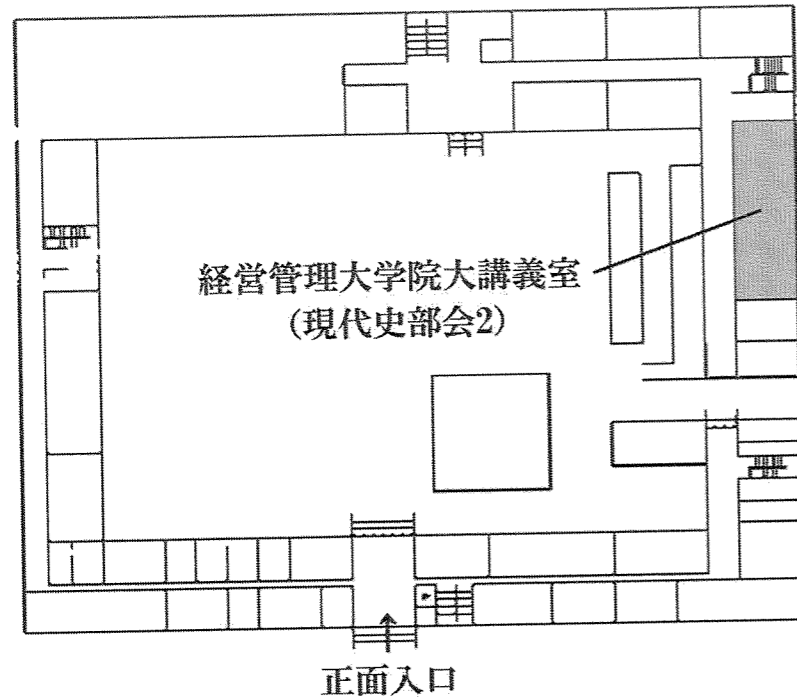
文学部校舎 1階



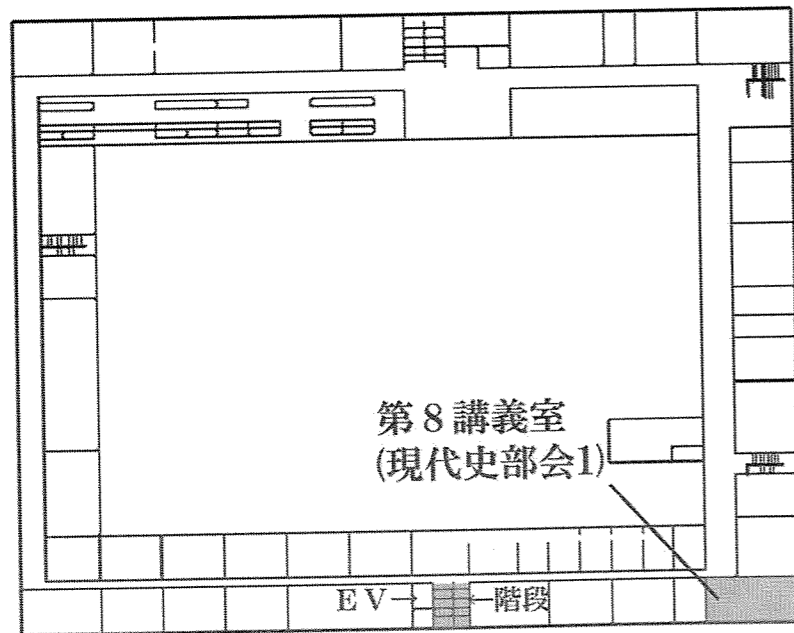
文学部校舎 2階



総合研究2号館1階



総合研究2号館地階



地階にある会場へは、総合研究2号館の正面入口から入って右折、すぐ近くの階段を下りて右奥へとお進みください。エレベータもご利用になれます。

連絡事項

大会当日の緊急連絡先：

総合研究2号館 2階南面 京都大学 大学院文学研究科 西洋史研究室内
第63回日本西洋史学会大会 準備委員会本部
電話とFAX 075-753-2791(大会当日のみ有効)

注文されたお弁当の受け取り場所：

京都大学生協同組合中央食堂 文学部校舎の東南すぐ近く 地階

昼食場所：お弁当を注文された方は、上記の京大生協中央食堂をお食事にご利用ください。ただし、ご利用いただける時間は12時～14時と限られておりますので、ご注意ください。

* 学会会場となっております講義室や百周年時計台記念館内国際交流ホールでのお食事はご遠慮ください。

飲み物の自動販売機：京都大学正門横、上記京大生協中央食堂北入口近く、文学部校舎1階にございます。

控室：第1日目 百周年時計台記念館2階西の奥、会議室4をご利用ください。
第2日目 文学部校舎2階 西の奥 第4講義室、第5講義室をご利用ください。

出版社の展示・販売：第1日目 百周年時計台記念館2階西側 会議室3
第2日目 文学部校舎2階中央 第2演習室と第3演習室

【全体シンポジウム】

2013年5月11日（土）13:30～16:30
百周年時計台記念館1階 百周年記念ホール

テーマ：「東アジアの「西洋史学」—国境を越えた対話をめざして—」

基調報告：林志弦（Lim Jie-Hyun）
（漢陽大学（ソウル）比較歴史・文化研究所所長）
「世界史—ナショナル・ヒストリーへの布石—」
（World History as a Nationalist Rationale）

コメント：小田中直樹（東北大学教授）
佐々木博光（大阪府立大学准教授）
橋本伸也（関西学院大学教授）
長谷川貴彦（北海道大学准教授）
長谷川まゆ帆（東京大学教授）

司会：小山 哲（京都大学教授）

全体シンポジウム

【趣旨説明】東アジアの「西洋史学」 —国境を越えた対話をめざして—

小山 哲

「西洋史学」という学問分野が日本に成立してから、1世紀余りが経過した。この間の西洋史研究者による研究の蓄積と、日本の歴史学界、さらには人文・社会科学全般への学問的貢献については、何人も否定することはできないであろう。しかし他方で、「西洋史学」という学問領域もまた歴史的な構築物であり、その学問的な可能性と、学問内外の諸条件に由来する制約性はともに、日本を含む東アジアの歴史的な状況によって、さまざまに変化してきた。近年のグローバル化の進展にもなって、「西洋史学」という学問分野の成立と展開の経緯、研究の視角や手法の変遷と日本がおかれた時代状況とのかかわり、欧米の研究成果を摂取するさいの選択と排除の基準、現地の学界や研究者との向き合い方など、「西洋史学」にかかわるさまざまな問題について、新たな視角からの再検討が求められている。

そのような新たな検討の視角として、本シンポジウムでは、「西洋史学」を、日本だけでなく、東アジアの歴史学が共有する学知の領域として捉え直し、国境を越えた対話のプラットフォームとしての「西洋史学」の可能性を展望することを試みたい。シンポジウムの第1部では、韓国を代表する西洋史研究者の1人である林志弦（Lim Jie-Hyun）氏に、東アジアにおける歴史研究の歴史と現状をふまえて、「西洋史学」を含む「世界史」という歴史認識の枠組みの特質と問題点について、基調報告をお願いする。第2部では、基調報告の内容をふまえて、日本側の西洋史研究者が、それぞれの視点から、「西洋史学」・「世界史」の問題点と可能性についてコメントする。

【第1部：基調報告】世界史—ナショナル・ヒストリーへの布石— 林志弦（Lim Jie-Hyun）

ナショナル・ヒストリーの最たる逆説は、それがナショナルなものではなく、トランスナショナルなものであるということだ。ナショナリズムの想像力は、ナショナルな空間ではなく、トランスナショナルな空間で育まれる。他のナショナル・ヒストリーとの比較を通してのみ、自らの固有性を本質化するナショナル・ヒストリーという個別科学（discipline）は、それ自体、すでに世界的次元において、文化的相互作用の産物であり、トランスナショナルな言説なのである。

この点において、世界史とナショナル・ヒストリーとは、排他的に相互対立するものではなく、同時に配置されてはじめて互いに意味をもちうる関係にある。ナショナル・ヒストリーを構築し、それを正当化し、かつ合理化する概念装置としての世界史の存在理由は、とくに東アジアにおいて克明に見て取れる。東アジア特有の〈国史—東洋史—西洋史〉という歴史学の鼎立構図そのものが、日本版オリエンタリズムの副産物にはかならない。

「西洋」に対して「東洋」でありながら、「東洋」に対しては「西洋」であり、オリエンタリズムの客体でありながら、オリエンタリズムの主体でもある、という日本のジレンマは、その程度や位階の差こそあれ、近代の軌道に編入された東アジアの他の諸地域、ひいては、世界史的近代の「構成的外部」=非ヨーロッパ世界一般のジレンマでもあった。東アジアにおいて、個別科学としての世界史の歴史は、西欧のオリエンタリズムと東アジアのナショナル・ヒストリーとの共謀関係を媒介しつつ、西欧中心の「普遍史」の枠組みのなかでナショナル・ヒストリーの固有性を浮彫りにする一方、「近代の超克」という旗のもと、近代への編入を強制してきた、矛盾した「知」の歴史である。

本報告は、東アジア特有の歴史学の鼎立構図のうち、個別科学としての「西洋史」の歴史への反省を通じて、世界史が構築してきた西洋と東洋、中心と周辺という二項対立の構図に揺さぶりをかけ、西洋を脱中心化し、東洋を脱周辺化するという新たな歴史的ナラティブの可能性を探る試みである。

【第2部：コメントと応答】

コメンテーター： 小田中直樹
佐々木博光
橋本伸也
長谷川貴彦
長谷川まゆ帆

司会： 小山 哲

部会別自由論題報告要旨

前 4 世紀アテナイの契約における集団の権利・責任
—金銭貸借・不動産賃貸借・請負契約における契約主体としての集団—
根本 泰充

前 4 世紀アテナイは、ポリスの穀物供給を海外からの輸入に頼った。その海上貿易に資金を提供した仕組みが海上貸付である。そして、古代ギリシア経済については、社会に埋め込まれた「原始的」な経済とみるのか、それとも市場原理が働く「近代的」な経済としてみるのか、という長い議論がある。海上貸付には完全に利子収入を目的とした金儲けの性格を指摘することができ、この性格は「原始的」な経済にはそぐわないといえるであろう。そこで、海上貸付に確認される関係者たちの結びつきをできるだけ詳しく考察し、彼らがどのような集団を形成していたといえるのか探ることは価値があると思われる。彼らのポリス社会経済への影響力を考える材料になるからである。本報告では、海上貸付契約および金銭に関わる各種契約に契約主体として現れる集団を取り上げ、連帯債権や連帯債務といった集団の権利・責任（義務）の存在が否定される前 4 世紀アテナイにおいて、本当にそれらを見いだすことができないのか検討してみたい。

イランにおけるアレクサンドロス遠征路の実地調査
—ペルセポリスへの道—

森谷 公俊

2012 年 9 月、イランにおいて、スーサからペルセポリスに至るアレクサンドロス大王遠征路の実地調査を行なった。その成果は以下のようなものである。

(1) 遠征軍がペルシア軍と戦った古代ペルシア門が現ヤスジ近郊のメーリアン溪谷に比定できることは、2012 年 5 月の西洋史学会で報告した。今回の調査では、アレクサンドロスが山を迂回して渡河点を越え、ペルシア軍の背後に出た経路を踏査し、迂回路をほぼ確定することができた。クルティウスの大王伝と照合すると、個々の記述は実際の地形に適合するが、叙述全体は相当に潤色されていることが明らかである。

(2) スーサ～ペルセポリス間の「王の道」には、山間部を通る夏のルートと平野部を通る冬のルートの 2 つが存在したと考えられる。アレクサンドロスはまず平地の冬のルートを進んでから山に入り、夏のルートに出てペルシア門に至った。そこでペルシア軍を破った後、さらに夏のルートを進んでペルセポリスに到着した。こうしてアレクサンドロスの行軍が、アケメネス朝の交通体系をそっくり利用して行われたことが証明できる。

アイトリア連邦における市民権と外交関係

岸本 廣大

古代ギリシアの「連邦」と呼べる共同体において、加盟ポリスの市民権の他に、連邦全体に適用される連邦市民権が存在したことは、古くから指摘されてきた。連邦の特徴ともされるこの「二重市民権」状態について、先行研究は連邦市民権によって認められる権利の内容とその適用範囲を議論してきた。だが、市民権は共同体の発展や外交関係に応じて変化する制度であるため、時代状況に位置づけた市民権の考察は連邦の動態を明らかにするのに有効な視角となる。

以上の観点から、本報告ではアイトリア連邦の市民権について、前三世紀後半に多く見られた「イソポリティア」を通して考察する。外部の共同体に市民権を付与、あるいは交換する「イソポリティア」の事例は、アイトリア連邦における連邦市民権が加盟ポリスの市民権を通じて付与されていた可能性を示唆する。この特徴を、当時のアイトリア連邦の拡大という文脈に位置づけることで、連邦の政策が加盟ポリスの制度を通じて実践されたことを明らかにしたい。

前 242 年コス島の使節団派遣と大アスクレピエイア創出

中尾 恭三

古代ギリシアの大祝祭は、ギリシア人の信仰、文化、同族意識を強化・再生産するはたらきをもっていた。この四大祭典に加え、「パンヘレニック」と呼ばれる祝祭が、紀元前 3 世紀以降ギリシア各地で創設されていった。それによって、祝祭を動因とした人の移動の流れが、前 3 世紀に新しく構築されていったと考えることができる。コス島のポリスは、前 242 年ギリシア各地の王・ポリスに対して使節を派遣し、医神アスクレピオスを祀る神殿の不可侵と地域の祝祭アスクレピエイアの「パンヘレニズム」化を求めた。現存する史料は、使節の訪問を受けた諸王朝、諸ポリスからコスへあてた書簡・決議碑文である。これらの史料を検討し、コスはいかなる文脈の中で不可侵と祝祭の「パンヘレニズム」化を計画したか、それがコスを中心とした国家間ネットワークの形成にいかにか寄与したのかを論じていく。

アンティオコス 3 世のギリシア進軍
—セレウコス朝の外交とアイトリア指導層の動向—

伊藤 雅之

本報告は、紀元前 192 年にギリシアに進軍したアンティオコス 3 世の行動から窺われる、同時期のセレウコス朝とアイトリアの関係と、両者の外交手法を検討する。先行研究はこの事件に関し、主としてローマとセレウコス朝の対外的なスローガンをめぐる対立や、その主張の実体、あるいはまた二大勢力の対峙という緊張状態から醸成された相互不信といった点を重視した議論を進めてきた。しかしその一方で、この二国の数年来の対立を武力衝突へと至らしめるべく奔走しながら、開戦が現実のものとなるや、俄かに消極的な姿勢を示したアイトリアの行動の不可解さにはそれほどの関心が払われてこなかった。本報告では、このアイトリアの動向に注目し、その内部における意見対立や、その中での主戦派の政策上の方法論やその動機、そして彼らの動きが共闘を持ちかけられたセレウコス朝の行動にどのような影響を与え、どのような要因から彼らの計画は失敗したのか、という観点からこの事件を見直していきたい。

プトレマイオス朝エジプトにおける嘆願と和解
—テーベ地方を中心に—

石田 真衣

プトレマイオス朝におけるギリシア法と在地エジプトの法は、並存しながらも、王の勅令に従属する法システムとして統合されていた。その多元的法システムが実際どのように運用されていたのかを論じるためには、在地社会における紛争処理を、紛争当事者の視点から明らかにする必要がある。ギリシア語による嘆願書に注目する近年の研究は、調停者としての地方役人の重要性を指摘している。しかし、ギリシア語パピルス文書の分析だけでは、複雑な民族構成をもつ在地社会の変容過程を知ることは難しい。ギリシア語による嘆願が在地社会においてどのように受容され、定着したのかを問うことが重要である。

本報告では、ギリシア語とエジプト語史料の両面から、プトレマイオス朝以前の慣習が色濃く残るテーベ地方を中心に、嘆願と和解の手続きを分析し、紛争当事者による多様な処理手段の戦略的利用と社会的関係性を考察する。これらの考察を通して、単純な並存関係ではなく、文化的な相互作用のなかで変容する在地社会の秩序維持のあり方を検討したい。

五賢帝期ローマ帝国における教養人と都市
—アプレイウス『弁明』に関する—考察—

本間 俊行

五賢帝期のローマ帝国では、政治的・経済的・文化的な統一が進展した。

アプレイウスは、この時期に活動した弁論家であり哲学者である。彼の残した『弁明 (Apologia)』は、彼が 2 世紀半ば、北アフリカの都市オエアの富裕な未亡人プデンティッラと結婚したことを契機に、その親族から魔術使用の容疑で訴えられた際、属州総督の前で行った法廷弁論であり、また五賢帝期の都市の状況を窺う上で貴重な史料の一つである。

アプレイウスは、北アフリカの一都市の参事会員層出身であり、ギリシアやローマに遊学した。彼がオエアで巻き込まれた裁判の背景には、親族間の財産争いだけでなく、外来の教養人とオエアの有力者である原告側との地域社会の名声をめぐる係争がみてとれるのではないか。このような観点から、本報告では『弁明』を中心に、アプレイウスとオエア社会の関係について考察し、五賢帝期における都市社会の変容について検討する手がかりを得たい。

ポルトゥス築造後のローマへの食糧供給システム

池口 守

ローマ帝政初期に首都の外港として築造されたポルトゥスで、近年、考古学調査が進んでいる。港のプラン、船舶の入港ルート、荷揚げと舁への積み替え、港湾設備、タキトゥスやスエトニウスの記述との照合など、新港に対する興味は尽きない。巨大かつ安全な人工港の完成によりオスティアやプテオリの港湾機能が代替された可能性はあるが、オスティアはむしろポルトゥス完成後に建築ラッシュを迎え、プテオリについても碑文史料などから 3 世紀まで一定の繁栄を認める議論もあり、物流システムにおけるポルトゥスとこれら港湾都市の関係は決して単純ではない。解釈の鍵になるのは倉庫群（ホレア）の貯蔵能力であり、ローマやプテオリの倉庫の情報は乏しいものの、ポルトゥスとオスティアの倉庫群の実態をもとに一定の洞察が可能になっている。船や舁の積載量なども勘案して蓋然性の高いシミュレーションを行い、物流の変化と都市の盛衰との関係を考察してみたい。

アンミアヌス・マルケリヌス著『歴史』における書記官「鎖」のパウルの記述

小坂 俊介

紀元後 4 世紀末にアンミアヌス・マルケリヌスが著したラテン語歴史叙述作品『歴史』*Res Gestae* は、古代末期地中海世界を知るための最重要史料として広く認知されている。この『歴史』に関する研究は、特に 20 世紀後半以降著しい進展を見せている。史家ギボンが『ローマ帝国衰亡史』において『歴史』に高い評価を与えたが、現在では著者アンミアヌスが持つ偏見や叙述における修辭が指摘されており、『歴史』の記述を無批判に受け入れるべきではないことが一般に認められている。とはいえ、その史料としての信憑性に関しては、研究者によって評価が分かれているのが現状である。本報告はこの問題に関するケーススタディとして、書記官「鎖」のパウルスなる人物に関する記述を主たる分析の対象とし、パウルの活動を再構成しつつ、その記述のバイアスを明らかにすることを目的とする。

カロリング期文書コミュニケーションにおける君主の尊称について

菊地 重仁

中世学において国王文書はもはや単なる法的行為の痕跡とは解されていない。テキストおよび記号的象徴やレイアウトなどの精緻な分析を経て、綿密に作り上げられたプロパガンダ媒体としても解されるようになったことに加え、儀礼を含めた文書発給プロセスもまた王と受給者および同席者との間での政治的コミュニケーションとして理解されるようになってきている。本報告ではこうした研究趨勢に倣しつつ、従来本格的に分析されてこなかった *nostra majestas* のような徳性を示す抽象名詞をもって表された王の尊称に注目する。君主の自己表象としての尊称用法に政治状況に応じた戦略性を見だしつつ、これらを君主宛書簡や献呈文などに見られる君主尊称と比較することにより、双方向的コミュニケーションの中に位置づけることを試みる。その際、各テキストの内容・執筆時期による尊称用法の変化に注目しつつ、尊称=徳性概念の各々を概念的に検討し、各概念が含有し得る意味の幅を明らかにすることに重点をおく。

ポンティニー修道院と隣人たち
聖エドム崇敬の展開を中心に

北館 佳史

一般にシトー会では修道生活の妨げになる危険ゆえに聖人崇敬や巡礼は敬遠される傾向にあったとされ、修道院空間に対する外部の接近に関してより厳しい制限を課していたと想定されている。実際にシトー会修道院が巡礼地として機能することは稀であるが、13 世紀半ば以降、ポンティニー修道院は重要なシトー派の巡礼地へと成長したことで知られている。1114 年にブルゴーニュとシャンパーニュの境界地帯に創建されたシトー第 2 の娘修道院であるポンティニーは、1240 年に客死したカンタベリ大司教エドモンド(エドム)が埋葬され、教皇により列聖されると、イングランドやフランスから多数の巡礼を集めることになった。隔離と分離を霊性の基調とするシトー会の修道院がどのようにして外部に対して修道院空間を開放し、聖と俗の接触する局面を管理し、周辺の社会との関係を再編成したのか。本報告では聖エドム崇敬に注目することでポンティニーと外部世界との関係の一側面を明らかにしたい。

1410年の二重国王選挙と「金印勅書」
—神聖ローマ帝国における「金印勅書」の受容史の一断面—

横川 大輔

皇帝カール四世の「金印勅書」(1356年)は、一般に1410年の二重国王選挙を転機として神聖ローマ帝国にとって重要な法文書と認識されていく、とされている。このときの国王選挙は、たんに新国王を選ぶものではなく、1400年の国王ヴェンツェル廃位事件の正当性、そしてヨーロッパ規模での政治問題だった大シスマ・教皇鼎立をめぐる問題に対する態度決定をも意味したのである。そして、この国王選挙は最終的にはジギスムントとヨプスト・フォン・メーレンの双方が国王にえらばれるという、「金印勅書」が禁止しようとした二重選挙となった。

本報告は、この選挙の過程で「金印勅書」がいかなるものとして認識されていたのか、具体的に把握することを試みる。そこから、この選挙までに「金印勅書」がまずどの程度知られていたのか、そしてその後どのように広まりえたのか、受容の展開についての展望を得ることとしたい。

中世末期トスカーナにおける賃金労働者の採用活動
—家の使用人の事例から—

濱野 敦史

中世末期イタリア都市社会で活動していた賃金労働者については、賃金や労働環境をはじめとしてさまざまな面から検討が加えられてきた。だが、その採用活動について注目されることはほとんどなかった。その原因は、主な検討対象とされた毛織物産業のような生産活動に携わる労働者に関して、利用可能な史料が欠如していることに求められる。一方、特殊な立場の賃金労働者ながら、家の使用人については検討に値する史料がトスカーナ地方にいくらか残されている。そこで本報告では、そうした史料のなかから、プラートのダティーニ家の書簡に含まれている記述を中心に分析することで、使用人の採用活動の実態をあきらかにすることを目指す。確認できることの中なかでも、採用する側と候補者がおたがいに能力や労働条件を踏まえて契約にいたっていることは注目に値する。使用人の労働者としての立場は低いとされることが多いが、不利な契約条件を押し付けられ、そのまま受け入れていたわけではなかった。

15世紀のギリシア系知識人とオスマン宮廷
—ゲオルギオス・アミルツィスを例に—

上柿 智生

1453年のビザンツ帝国滅亡に引き続き、1461年小アジア黒海沿岸部においてもトレビゾンド帝国が滅亡することで、ビザンツ帝国から派生した政治体は全て失われることになった。この状況に対し、ギリシア系キリスト教徒の出自を持つ「ビザンツ系知識人」たちは、大体において西欧諸国へ移住するか、コンスタンティノープル総主教座やオスマン宮廷を拠り所としてオスマン帝国内に残留するかを選択を迫られた。本報告で扱うゲオルギオス・アミルツィスは、トレビゾンド生まれの知識人であり、トレビゾンドの陥落に際しイスタンブルに連行された後にスルタン・メフメト二世に仕えた人物である。彼は当時の大宰相マフムト・パシャと親族関係にあるとともに、同時代のビザンツ系知識人とも連絡を取り合い、哲学的な議論も交わしている。彼周辺の人的関係を政治的・知的文脈に即して再検討することで、新体制への追従の側面が強調されがちなオスマン宮廷のギリシア系知識人の行動様式を再考する契機としたい。

ピーテル=ブリューゲル絵画に残る社会的結合（ソシャビリテ）の痕跡

奥田 真結子

本稿は、16世紀のネーデルラントの画家であるピーテル=ブリューゲルの絵画作品を、民衆文化論を用いて歴史学の方法論で分析したものである。これまで、ブリューゲルの作品の多くは美術史の中でしか扱われてこなかった。しかし、アナール学派的「伝統社会について象徴儀礼が果たす役割である祭りのような儀礼的・象徴的事象の研究も、生産関係の研究などと同様に、ある社会を理解するための重要な手がかりとなる」という考えに依拠し、彼の作品を芸術作品としてではなく、歴史の史資料として扱うことを新たな分析視覚としている。歴史上のブリューゲルの実像とその歴史学的な位置を明らかにし、社会的結合関係（ソシャビリテ）や集団的心性から捉え直すという実証研究を重点的に行なったものである。

16世紀前半ネーデルラント中央政府の渉外活動
—1529年カンブレ平和条約履行における君主・外国・地方—

加来 奈奈

ネーデルラントは、中世後期からブルゴーニュ公より領域の国家的統合が進められ、後継者であるカール5世治下にその統合は達成されたといわれる。しかし、他にも支配する国家、領域を有するカール5世は長くネーデルラントには不在であり、ネーデルラントとフランスとの境界を確定した条約であるカンブレ平和条約(1529年)も、ネーデルラント中央政府が派遣した使節が活躍して締結された。とはいえ、この条約は、イタリア戦争における皇帝カール5世とフランス王フランソワ1世の平和条約でもあった。ネーデルラント自体が独自の領域統合を行うなか、ネーデルラント中央政府から派遣された使節はどのような役割を担っていたのか。本報告では、このカンブレ平和条約の事項実現の際に、ネーデルラント中央政府から、カール(君主)、フランス(外国)、ネーデルラント各地に派遣された使節を考察し、ネーデルラントがカール5世の平和条約に関わるメカニズムとその目的について明らかにしたい。

有力市民アーニョロ・デ・バルディの遺産分割
—16世紀フィレンツェにおける有力市民の姻族関係—

柏淵 直明

共和政フィレンツェでは、共和制理念と有力市民の権力掌握を繋ぐものとして、人的な結びつきが重視されていた。本報告では、有力市民の姻族関係やその中で女性の立場を明らかにするため、遺産分割を検討する。姻族関係については、婚姻や嫁資における女性の権利に関する考察に比して、それ自体の研究は少ない。近年、女性の権利が大きかったことが明らかにされ、従来の男系男子優位の相続の考えは修正されつつある。しかし、これらの研究は、世代交代の観点から男系親族間の結合(姻族関係)を捉えてはいない。当時、相続人たる息子がいない世帯が4割あり、女性相続が少なからず行われたことから、男系男子がおらず娘を包括相続人としたアーニョロ・デ・バルディの遺産分割を分析する。グイッチャルディーニ家古文書室が所蔵するヤコポ・グイッチャルディーニの覚書を史料とし、以下の手順で検討する。1)有力市民の指標の確認。2)フィレンツェの相続の検討。3)相続(1512)とその再分割(1519)の分析である。

近世マインツ選帝侯領における請願とポリツァイ
魔女裁判の財産没収法令を例に

小林 繁子

請願は民衆による上位権力に対する働きかけの伝統的な手段の一つである。本報告は、請願がポリツァイ条令の成立と履行とにどのように影響したのか、マインツ選帝侯領の魔女裁判を題材に描き出すことを試みるものである。

魔女裁判において処刑後に被告の財産を没収することはマインツ選帝侯領では合法であり、16世紀末には財産没収を定めた法令が発布されているが、その執行をめぐる数多くの請願が選帝侯政府に寄せられた。1612年にこの法令が改正されていることは、民衆による請願を通じたポリツァイ形成への働きかけと見ることができる。1612年の改正ののちにも請願は寄せられ、それに応じて改正法令も「君主の慈悲」という法の枠外の要素を含めて弾力的に運用された。16、17世紀の請願状とポリツァイ条令の内容、また財産没収の実態を合わせて検討することで、近世ポリツァイ条令の持つ交渉可能性と柔軟性を明らかにしてみたい。

リシュリユー宰相期 (1624~1642) の官職保有者集団

岡本 明

「絶対王政は社団に依拠して統治した」というテーゼは、現在自明のものになっているが、それは静止画法的な二元支配の構図ではなく、生成期・最盛期・末期の推移に伴い、両者の関係が重要な変転のあったことを認めねばなるまい。

16世紀フランスは売官制を通して第三身分有力者層が統治体制の内部に浸透した時代であり、次いで、絶対王政生成期である17世紀前半は、社団とよばれる団体、諸官職保有者集団が波状的に新設・増設され、相互間に反目の生じたこと、王権がこれを利用して租税制の導入等により、状況を有利に導き、フロンドの反乱を挟みながらも、対社団関係の優位の裡に安定期＝ルイ14世親政を迎えることは認めてよかろう。本発表では、リシュリユー宰相期に焦点を据えて、かれの「保有官職」観念、対王族・貴族政策を進めるうえでの官職保有者集団との関係を問い、保有官職者団体相互の摩擦をいかに利用したかを辿った上で、財政収支において売官制がもつ比重を明かにしたい。

スコットランドにおける宗教対立と長老教会のジレンマ
—革命体制受容の1断面—

武田 和久

本報告では、18世紀前半のスコットランド長老教会総会ならびにその執行委員会の議事録と宗教的・政治的論争に参加した人々の著作・書簡を主な史料として、1707年のイングランド・スコットランド合同について議論されていた時期の長老教会の政策と長老派牧師たちの両国合同に対する認識について明らかにし、考察を加える。

1707年合同前後における宗教の重要性はこれまで多くの研究者によって言及されながら踏み込んだ研究がなされてこなかったが、近年ようやく Jeffrey Stephen と Alasdair Raffe により、同時期のスコットランドにおける宗教対立に関する研究が発表された。一方で、彼らは「議会に理解を示し、合同論争にも比較的静穏であった教会組織」と「長老派と監督教会派の対立を軸に、合同に対して激しく抵抗した教会組織と教区民」という、相反する見解を示している。本報告では、一見相反する彼らの見解が当時の宗教的複雑性の別の側面、表と裏を示していたことを、長老教会の政策とその周辺の議論を通して教会が抱えていたジレンマを読み解くことから明らかにしていく。

ハンブルク - リューベック - バルト海：
近世におけるハンザ商業路と商品流通

菊池 雄太

中世ハンザ商業の基幹貿易路を形成していたハンブルク（北海） - リューベック（バルト海）間の東西陸上貿易は、15世紀以降、いわゆるズンド海峡を経由する北海 - バルト海間海上交通の発達により、その経済的意義を失ったとされる。しかし海上交通はヨーロッパ諸国の政治対立や気候条件の影響を受けやすく、その度に陸路・河川路商品輸送が選択されていたことが研究上主張されている。この陸上貿易は、近世北海・バルト海両地域の結びつきを知る上で重要なテーマとなるが、実証研究は乏しい。本報告は、ハンブルクとリューベックでの文書館史料調査により得られた数量データを基礎とし、17、18世紀におけるハンブルク・リューベック・バルト海地方間の物流を分析する。そこから、両都市間陸上貿易が対象時期のさまざまな局面において活発に利用されていたこと、さらにその商品取引はリューベックを通じてデンマーク、スウェーデン、リフランド、ロシアなどのバルト海の各地域と結びついていたことが示される。

ブリテンの船舶必需品調達と北米北部植民地政策
—1722年の海軍資材法改正を中心に—

日尾野 裕一

1704年に制定された海軍資材法の影響で、1710年代半ば以降のブリテンは、船舶必需品であるピッチ・タールの主要供給源をバルト海貿易から北米植民地に転換した。しかし、法律内で主たる購入者として想定されていた海軍は、従来通りバルト海貿易によって得られる物資を中心に購入し、北米植民地産物資の品質については不満を持っていた。その結果、1710年代後半から1720年代前半にかけて、北米産船舶必需品供給の再検討が行われ、海軍と商務院に加え、商人や植民地総督といった利害関係者を巻き込んだ議論が展開された。そして、この議論は海軍の船舶必需品調達のみを論点とするのではなく、ユトレヒト条約以降のブリテンの北米北部植民地政策としての観点が強く表れていた。

そこで本報告では、ブリテンによる北米植民地での船舶必需品生産計画、特に1710年代以降の計画見直しの議論と1722年の海軍資材法改正から見られる北米北部植民地への認識を、商務院及び海軍の行政文書を基に明らかにしたい。

啓蒙専制期ハプスブルク君主国におけるコミュニケーションネットワーク
—いかにしてウィーンで禁書は流通していたのか—

上村 敏郎

近年の書物史研究の結果、18世紀のヨーロッパ全域を網羅する書籍市場ネットワークの様態が徐々に明らかになってきている。こうした研究は特に国境を越えた啓蒙知の伝達という点に着目し、禁書流通の過程を明らかにしようとするものである。発表者が問題とする啓蒙専制期ハプスブルク君主国においても、18世紀後半、居城都市ウィーンを中心に書籍市場が発展した。ヨーロッパにおける禁書流通という観点からみると、ウィーンはオランダ・ベルギーと東中欧地域を中継する重要な拠点として機能していた。また、フランス革命勃発後、ウィーンで一部の靴職人がフランスの啓蒙主義者ドルバックの『自然の体系』に影響を受け、物質主義的無神論を自分たちのコミュニティの中で展開し、逮捕される事件が生じた。こうした事例はウィーン市内における禁書の流通とその影響を示している。本発表では書物の流通を軸とした、ハプスブルク君主国におけるコミュニケーションネットワークを明らかにしたい。

「環大西洋革命」期のイギリス地方都市における急進主義と奴隷解放論
—リヴァプールのウィリアム・ロスコーを中心に—

田村 理

18・19世紀転換期のイギリスにおける急進主義的な政治改革運動は、これまで一国的な枠組みのもとで解釈されてきたが、今日ではより広く、「環大西洋史」の文脈におきなおして再考することが求められている。そうすることによって、この時期のイギリスが、国内では自由主義的な「改良」を進展させたにもかかわらず、海外では人種主義的・帝国主義的な態度や振る舞いを強化していった事実を、無理なく説明できると考えられるのである。

この課題にアプローチするための手がかりとして有力視されているのは、同時期に浮上した、「奴隷解放論」、すなわち、大西洋奴隷貿易および西インド奴隷制を廃止すべきだとする言説である。そこで本報告では、「奴隷解放論」と、急進主義的な政治改革運動とが、いかに相互に絡まりあいながら、既存の社会構造や政治体制を変革するための青写真を提供しようとしていたのか、という点について考察したい。

女性預言者ジョアンナ・サウスコットの「神の子」妊娠
—ナポレオン戦争期イギリスにおけるメディアと信用経済をめぐる—
清原 和之

女性預言者ジョアンナ・サウスコット(1750-1814)は、近代のメディアを利用した稀有な存在である。この預言者は1814年に突如、「神の子」の妊娠を宣言した。その知らせは瞬く間にイギリス全土に広まり、賛否両論を巻き起こすこととなった。本報告ではこの「妊娠」騒動の意味を、事実経過を追いながら明らかにしていく。なぜ、「神の子」妊娠という突飛な発言がメディアの分裂を引き起こしたのか？その理由の一端は、「神の子」という神秘性よりも、「妊娠」が事実となるか否かが争点となったことにあった。理性を標榜する医者や批評家たちによる真面目な議論が「妊娠」の信憑性を高めた。また、熱狂と懐疑、期待と不安の両方を惹起させる「神の子」妊娠の不確かさは、投機と破綻を繰り返す信用経済の不安定さと共振関係にあった。「妊娠」への投機的熱狂とその束の間の破綻という出来事は、信用の動揺に翻弄される当時の民衆の姿を象徴していた。こうしたナポレオン戦争期の時代状況を、風刺画を通して分析する。

ピット・クラブ

—トリー党の全国的政治ネットワークに関する一考察、1808-1832—

正木 慶介

本報告は、ピット・クラブという政治的結社の分析を通じて、19世紀初頭のイギリス政治史を再検討することを目的とする。ピット・クラブは、同時期に再建されたトリー党による、議会外政治運動の一環として展開した。最初のピット・クラブは、ウィリアム・ピット（小ピット：1759-1806）の死から二年後、彼が築き上げた統治体制と政治原則の保持を目的として、ロンドンに創設された。その後、急進主義が全国化し、さらにウィッグ党を支持する議会外勢力が影響力を持ち始めると、50を越えるピット・クラブがブリテンの諸都市に建設され、保守派の全国的政治ネットワークが形成された。本報告は、こうしたトリー党の議会外運動がいかなる意義を持ったのかを、特に組織・リーダーシップ・言語の観点から検討することで明らかにし、さらに、従来の政治史が前提としてきた歴史理解に対し修正的論点を提示する。

都市の共同墓地

—19世紀イギリスの死者の共同体に関する考察—

久保 洋一

19世紀イギリスにおける民間共同墓地に関する先行研究と自治体共同墓地に関する発表者による研究をもとに、発表においては、都市における共同墓地の特質を解明したい。重視するポイントは第一に墓地の埋葬地の一種である聖別地である。聖別地とは、国教会の主教が聖別し、国教徒のみが埋葬された埋葬地である。国教会の伝統的な埋葬地であった教区教会墓地も、その埋葬地は聖別地である。埋葬地に聖別地を設定する慣習が共同墓地にも持ち込まれた。この聖別地の位置づけを民間共同墓地と自治体共同墓地の双方で比較したい。この比較によって二つの共同墓地の墓地としての性質が解明されるだろう。重視するポイントの二つ目は共同墓地の建設と運営を担った組織である。民間共同墓地であれ、自治体共同墓地であれ、この組織のあり方を比較することで、二種類の共同墓地の都市における位置が判明するであろう。これらの考察を通じて、死者の共同体たる共同墓地がイギリス社会に持った意味までを考える。

19世紀英国における伝染病法

—議会の論戦に引用される専門家の言葉を手がかりに—

田村 俊行

公衆衛生における国家の責任が増大しつつある中で、特定地域の売春婦の身体管理を定めた伝染病法（1864年）は、売春行為と梅毒の関連性を強調し、売春婦の病院での拘束と定期的な身体検査を正当化した。これは、道徳の問題として捉えられていた売春行為を医学的見地から解釈し、国家を後ろ盾に干渉することを意味しており、医学によるセクシュアリティの管理の到達点であった。

これまでの研究では、伝染病法を検証する特別委員会において議論を先導していた売春婦管理肯定派の医師らに言及することで、その支配的な影響力が強調されてきた。一方、同法の廃止法案の是非をめぐって22年ものあいだ議会が紛糾していたことを考慮すると、医師の支配的な影響力というこの図式を議会の論戦の中に単純に当てはめることはできない。このことから本報告では、論戦の中にしばしば引用される専門家の見解に注目し、その利用のされ方を分析することで、議会における専門家の言説の位置を明らかにしたいと考える。

小ピット政権のインド政策に関する一考察
—18世紀末のイギリス正規軍のインド派遣論争をめぐって—

鹿野 美枝

本報告は、1787-8年に政府と東インド会社との間で起きた一つの論争に着目する。この論争は、イギリス正規軍をインドへ増派する小ピット政権の意向に会社が反発し、両者の対立が表面化した事例であり、その主要な論点は、派遣の正当性および決定権、費用負担であった。論争の背景には、小ピット政権が1784年頃よりすすめていた、当時急速に拡大した東インド会社軍を、正規軍へ統合する計画があった。正規軍派遣をめぐる論争は、その展開過程で、政府によって軍統合問題と結びつけられ、ともに本格的な展開をみた。翌年、政府は宣言法制定という強硬策で論争解決を図った。宣言法の成果は、会社軍将校らの激しい反対のため軍統合に至らなかった点では限定的にみえるが、小ピット政権のインド政策において理念上新たな局面を切り開いたといえる。本報告では、この事例から小ピット政権のインド政策の在り方を考察し、それが国内改革に大きく影響されていたことを明らかにする。

自然誌・医学・帝国統治
—19世紀後半イギリスにおけるコブラ毒の議論をめぐって—

伊東 剛史／高林 陽展

本報告は、19世紀後半イギリス帝国のコブラ毒問題に焦点をあて、帝国統治における自然誌と医学の位相を検討する。具体的には、(1)コブラ毒問題の顕在化、(2)自然誌におけるコブラ毒の表象と想像、(3)医師やインド植民地政府の対策に分けて検討する。

1852年、ロンドン動物園における飼育係の死亡事件を契機に、コブラ毒の本質と対処方法が世間の注目を集めた。事件は、抗いがたい死という身体感覚と、死と隣り合わせの植民地生活の恐怖に対する、人々の想像力を駆り立てたのである。一方、インド植民地政府は1872年、ヘビ毒問題を検討する委員会を設置して本格的な対策に乗り出し、1896年には、パスツール学派の医師による血清分離が発表された。しかし、インドに血清を配備することは難しく、マンガース導入などによる、コブラ撲滅の試みが議論され続けた。このように、コブラとその毒を馴致せんとする自然誌と医学の試みは、植民地の自然と植民地人の身体に介入しながら、帝国統治のための新たなプログラムを模索していったのである。

ヴィクトリア期英帝国の繁栄とエルギン伯爵一族の歴史
—スコットランド貴族の参画と貢献—

北 政巳

1837年6月から1901年1月までのヴィクトリア女王の統治時代はまさに産業革命を達成した英国が世界を自由資本主義秩序で包摂し「陽の沈まぬ帝国」として栄え、7つの海を蒸気船で連結した繁栄の時代である。その背景に活躍したスコットランド人貴族の第7代から第9代のエルギン (Lord Elgin) から英帝国の繁栄を考察する。

1707年の「経済的合併」により『連合王国』(United Kingdom)となり長年のイングランド劣位の立場を変革し、18世紀後半のスコットランド・ルネッサンスから啓蒙主義を導き、伝統の実学教育を活かし産業革命を主導する。

ヴィクトリア期英国が「世界の工場」と賞賛された時代、鉄工・蒸気機関車・蒸気船・機械工業の発展により西部スコットランドは「英国の心臓」と呼ばれる繁栄を極める。ヴィクトリア朝の大英帝国を支えたスコットランド貴族の象徴にエルギン伯爵一族が挙げられる。特に第7代エルギン伯爵は大英博物館所蔵の「エルギン大理石」により、第8代エルギン伯爵は「自治国カナダ創建者」また第2次アヘン戦争と呼ばれるアロー号事件で中国への特使、さらに1858年の日英通商条約の締結者として、さらに第9代エルギンは父と同じくインド帝国の副王となり「インド鉄道敷設の王」と称えられた。彼らの生涯と活動を通じてヴィクトリア期英帝国の繁栄の実像に迫る。

インド総督第4代ミントー伯爵とその妻メアリ
20世紀初頭インド統治におけるイギリス帝国の貴族

和田 応樹

イギリスのインド統治は、中央集権的な行政機構と近代的な植民地軍に支えられ、インド総督は民政と軍政の最高権力者としてそれらを率いた。第4代伯爵ミントーは20世紀初頭の1905年から1910年までインド総督を務めたイギリス帝国の貴族である。彼の統治期はインド・ナショナリズムの興隆に対応する変革の時代にあたり、インド統治の両輪である行政機構と軍制の改革が行われた。従来の研究では、副王の称号を持つインド総督については、その装飾的な役割や責務が注目されてきた。本報告では、当時の総督が置かれていた力学関係を踏まえつつ、実質的な権力を持つ総督像に焦点を当て、改革期の総督ミントーとその妻メアリを取り上げる。総督の出自や経歴にも着目し、植民地統治の担い手としてイギリス帝国の貴族がどのような存在であったのか。「帝国に白人女性の居場所はない」と言われた統治の現場で、メアリがどのように活動したのかを考察する。イギリス帝国における植民地統治の多様な実態とそれを支えた貴族の姿を描き出したい。

19 世紀ドイツにおける自由主義と都市救貧事業 —ケルンを例として—

平松英人

ドイツ特有の道徳テーゼに典型的にみられるような、近代化過程における自由主義に対する否定的評価はいまだ根強いものがある。しかし近年、とりわけ地方自治との関連でその歴史的意義を見直す作業が進められている。中でも特に注目されるのは、都市社会事業と自由主義との関係である。19 世紀半ばに自由主義的経済市民層によって創設されたエルバーフェルト制度が、公的救貧事業の成功モデルとされたのは、それが近代市民社会の理念と行動規範を都市救貧事業の実践において制度化していたからに他ならない。ケルンで目指されたのも、「公共の福利」理念を共有した幅広い市民層が、名誉職救貧委員として、行政と協働しながら制度の中核を担う公的救貧事業の確立であった。本報告では、こうした自由主義的理念と行動規範が、都市救貧事業においてどのように理解・実現され、実践過程においてどのように機能したかを、都市救貧事業の担い手たちとそのひろがりに着目し、具体的に明らかにすることを試みる。

近代ロシアの商業出版と評論家 V・V・スターソフ

巽 由樹子

ヴラジーミル・スターソフは 19 世紀後半ロシアの代表的な評論家であり、国民的芸術を創成すべきことを主張して、絵画では「移動展派」、音楽では「五人組」を熱烈に支持した。このような彼の主張は、ロシアのナショナル・アイデンティティ形成を分析した近年の諸研究で論拠として引用される。だがスターソフの著作は、姪が古参ポリシェヴィキの一員だったためにソ連時代に過度に権威化された側面があり、すでに音楽学の分野では、同時代における彼の影響力が再考に付されている。こうした研究状況を背景に、本報告はスターソフと出版界との関係を分析する。彼の評論活動は、「厚い雑誌」と呼ばれた文芸誌やリベラルな大新聞などの知識人向けメディアで開始されたが、後に保守的な大衆新聞や絵入り雑誌など、新しく現れた商業メディアへと移った。そのキャリアを分析することで彼の世論に対する働きかけの実相を明らかにし、ナショナル・アイデンティティ形成の考察のための材料とするのが本報告の目的である。

バルカン戦争期の「ヘレニズム」 —ギリシア・ナショナリズムとマケドニア—

村田 奈々子

1912 年～13 年のバルカン戦争は、近代ギリシア史にとって一大転機と見なされる。戦勝国となったギリシアは、念願のマケドニア南部と港湾都市サロニカを新領土として獲得した。新領土には、スラヴ語話者、ヴラヒ語話者、ラディノ語話者であるユダヤ人といった、ギリシア語話者以外の人々も暮らしていた。その結果、民族的・言語的な視点から見た場合、ギリシア国境内には、異質な要素がより多く含まれることとなった。

本発表では、バルカン戦争期のギリシア王国で出版された様々なエッセイや論考に見られる「ヘレニズム」に関する言説を検討し、「ヘレニズム」概念が、マケドニア獲得のための闘争において、ギリシア・ナショナリズムに大きく寄与したことを明らかにする。さらには、マケドニアをめぐるバルカン諸民族の対立が深まるなかで、「ヘレニズム」概念が、「排外的」でありながら「包摂的」という、ふたつの相反する意味内容を持つにいたったことを論じる。

第一次世界大戦とジークフリート・クラカウアー

吉野 恭一郎

ジークフリート・クラカウアー(Siegfried Kracauer, 1889-1966)は、ヴァイマル・ドイツを代表するジャーナリストである。彼はフランクフルト学派と深い繋がりを持つことでも知られ、1920 年代には「生の意味の模索」という形而上的な問題意識に基づいて、中間層を中心に危機意識が広がっていた当時のドイツ社会を、独自の観点から分析した。先行研究は、ヴァイマル期を取り扱ったものがほとんどである。しかし近年の研究で、1910 年代と 1920/30 年代の間には、思想的に重要な連続性があることが明らかになってきた。とりわけ彼の最大の特徴であり、"Grenzgänger (境界線を行く者)" と評される、既存の世界観やイデオロギーに対する距離感は、すでに第一次大戦期からはっきりと表れている。このことは、クラカウアーの思想遍歴について再考を促すだけでなく、20 世紀初頭の中間層および教養市民層における「精神的宿無し(geistig dachlos)」問題を考える上で、極めて大きな意味を持っている。

フランクフルトの「アフリカ」
—19世紀前半のドイツ語圏における自然誌コレクションの有用性—
櫻井 文子

博物館や美術館といった公共のコレクションは、特に 19 世紀以降拡充が進んだが、本報告では、都市や国家の威信を体現する象徴的施設としてこうしたコレクションが果たした役割について、フランクフルトのゼンケンベルク自然誌博物館を例に考察する。1830 年代初頭から世紀中頃にかけての一時期、同博物館の動植物コレクションはヨーロッパ屈指のものとされていた。同博物館が所有する北西アフリカ産の動植物標本の多くが、他の研究施設にはない希少なものであったからである。本報告では、同博物館がフランクフルトとは直接的な関連が薄い北西アフリカの動植物に特化するに至った経緯について、同時代の他の博物館との比較を交えて検討する。異国の動植物のコレクションは、帝国主義の視角から分析されることが多いが、ここではあえて博物館の運営形態や後援者層などの地域的な要因を掘り下げることで、こうしたコレクションが当時どのような象徴的な有用性を発揮したのか、新たな切り口から考察したい。

19 世紀中葉の欧米列強によるアジア戦略とそのネットワーク形成過程の解明

小暮 実徳

本報告では、主に 1850-60 年間のアジアにおける欧米列強の政治外交活動に焦点を当て、その後先鋭化する西欧諸国のアジア進出の初期的状況とその萌芽的ネットワーク、その構築過程を、アメリカ合衆国ニューヨーク・シティカレッジ所有『タウンゼント・ハリス個人文書・書簡集』に含まれる「ハリスの手紙」に基づき分析し、その歴史的意義を考察する。

初代駐日アメリカ総領事・弁理公使ハリスは、必要な業務遂行以上と思われる非常に多くの書簡交換を、アジアに居住、または訪れる自国の友人・同僚、更には各国要人と行った。これは当時、日本における彼の孤独な状況からとも判断できる。しかしそれ故、同史料からは、当時の初期的な欧米列強のアジア進出とそのネットワーク形成の様相、また現地の実相がまざまざと浮かび上がってくる。そこでこの史料を中心に、当時を再検討し、その後先鋭化する欧米列強のアジア進出の意義を明らかにする。

ドイツ帝国成立期における在華ドイツ系領事館の統廃合問題
—「大南澳開墾阻止事件」(1868—1869 年) への対応を例として—
鈴木 楠緒子

台湾の樟脳貿易をめぐる清朝政府と欧米商人との抗争が激化していた 1868 年春から 1869 年秋にかけて、ハンザ都市ハンブルク出身の台湾淡水駐在ハンザ領事ミリシュ James Milisch が、イギリス人ホルン James Horn とともに、清朝との条約に「違反」して大南澳に住む「生蕃」と交渉し、土地の開墾を開始したものの、清朝側の抗議により撤退を余儀なくされるという事件が起こった。これが列強の台湾侵略史研究の中で通常「大南澳開墾阻止事件」の名で知られるものであるが、本報告では、ミリシュがこの事件の結果、中国における事実上最後のハンザ領事となった経緯に着目し、この事件をプロイセンとハンブルクが清朝との国交樹立時より繰り広げてきた在外公館の統廃合をめぐる対立の歴史の中に位置づける。このような作業を通じて、ヨーロッパ大陸内部の勢力争いから論じられることの多かったこれまでのドイツ帝国成立史研究に、新たな知見を加えることとしたい。

20 世紀初頭の東アジア地域におけるハプスブルク帝国海軍
—ハプスブルク帝国とグローバリゼーション—

大井 知範

本報告では、欧米列強のグローバルな世界展開が進む 20 世紀初頭において、ヨーロッパの大国であったハプスブルク帝国がこのグローバル化の歴史といかに関わっていたかを在外海軍の活動を手掛かりに検証する。本報告で検討する具体的論点は、①東アジアにおけるハプスブルク帝国海軍の活動の実態、②海外植民地を持たないハプスブルク帝国海軍の東アジア常駐を可能にしていた条件、③そもそも利害の少ない東アジアに軍艦を常駐させていた理由、④派遣司令官報告から浮かび上がる 20 世紀初頭の東アジアにおける海軍世界全体の様相、以上の 4 点から構成される。なお、従来の海軍史研究は直接的な戦闘の側面に関心を集中していたが、本発表では、平時の海軍の活動や機能(諸港巡回、交流、情報収集等)に重点を置き、海軍の存在意義やグローバル化との関わりを広い視野で考察する。

戦間期の境界地域における宗派とネイション
—チェコ、ポーランド、ドイツ境界地域を例に—

森下 嘉之

本報告は、第一次世界大戦後に成立したチェコスロヴァキア、ポーランド、及びドイツ東部の境界地域における宗派とネイションの関係を考察する。三国の境界地域は、現在のチェコ共和国とポーランドに跨るチェシーンと呼ばれる地域であり、多言語・多宗派という社会的背景を有しながら、大戦後の国際条約によって分割された歴史を持つ。加えてこの地域は、カトリックが強いハプスブルク帝国の中では例外的に、プロテスタント（ルター派）が一定の比率を占める地域として知られてきた。ルター派は数的にはマイノリティであるが、19世紀に台頭した自由主義市民層と密接な関係を持ち、同地域では強い影響力を有していた。他方で、彼らルター派は帝国維持と帝政末期に勃興した民族主義の間で揺れ動く存在でもあり、大戦後には教会のネイション別分離へと至った。本報告は、ネイション別分離を経験した宗派と新国家の地域社会との関係、その一端を明らかにすることを試みる。

ポスト冷戦期ドイツにおける第一次世界大戦史研究と歴史家たち

鍋谷 郁太郎

ドイツにおける第一次世界大戦史研究は、敗戦直後から戦争責任問題の弁明論的相対化の追求から始まった。第二次世界大戦後において、1960年代のフィッシャー論争、そして1970年代の社会構造史派の台頭の中で、これまでの弁明論的第二次世界大戦像の再吟味と大幅な修正を迫られることになる。さらに80年代は、アナールの社会史の手法を取り入れながら、大戦の日常に深く切り込んでいく地域研究や総力戦体制の中の女性史研究も出現し始める。1990年代に入って、第一次世界大戦史研究のモノグラフィの数は飛躍的に増大し、挙国一致体制の再吟味を様々な方向から試みる様々な新しい成果が発表されている。

本発表は、上記のような研究動向を踏まえて、ポスト冷戦期におけるドイツでの第一次世界大戦史研究の方向性を総括しようという試みである。

「文化共同体」から「民族共同体」へ？
—ドイツとオーストリアの合邦推進団体による文化事業—

長沢 優子

第一次世界大戦後、ドイツとオーストリアの「合邦」は講和条約によって禁止されたが、両国は将来的な国家統合の実現を企図し、その準備として諸領域で両国間の「同一化」を進めようとした。法や交通、郵便制度などの統一の試みのほか、独逸関税同盟もその一環として計画された。合邦の表立った準備的行為を禁じられていた両国政府に代わり、民間に設立された合邦推進団体が政府の援助を受けながらそれらの作業を行った。

しかしそのような制度的調整と並んで重視されていたのが、「民族の文化的、精神的一体感」を醸成するための文化事業だった。本報告は、主に1920年代から1933年までのドイツとオーストリアの合邦運動の活動および思想的展開を、合邦推進団体による文化・教育事業から明らかにする。そしてそれを19世紀のドイツ統一運動から1938年のナチ・ドイツによるオーストリアのドイツとの「再統一」に至るまでの大ドイツ主義の歴史の中に位置づけることを試みる。

ナチ政権下の芸術家

—ある出版社の人的ネットワークを手がかりに—

穴山 朝子

本報告では、レーゲンスブルクのグスタフ・ボッセ出版社（Gustav Bosse Verlag, 1912-1943）に遺された文書から、ナチズムと芸術家や知識人との関係性を照らし出すことを試みる。ここで出版社という空間的な場に交差する人々の人間関係と日常活動に注目し、①ナチズムの文化政策やその芸術観が彼らの活動や意識に浸透していく過程、②独裁政権に不満を抱きつつも、最後までナチ体制への期待を失わなかった芸術家と知識人の心性とナチ文化政策に対する言説を分析し、ヴァイマル共和国時代、1933年のヒトラーの権力掌握以降の時期、そして第二次世界大戦期などそれぞれの段階における芸術家たちの言論の変化過程を検証する。最終的には、1920年代より大衆文化とメディアの出現という状況に直面した芸術家たちが、著作権保護や失業問題など政策上の新しい課題に対応を迫られるナチ政府とも共通する利害を見出し、結果的にナチ体制を支えていくことになっていく点を明らかにしたい。

誰がための森林？
西ドイツにおける自然公園とナショナルパーク (1949-1970)

岡内 一樹

第二次世界大戦後の西ドイツでは、「自然（保護）公園」や「ナショナルパーク（国立公園）」と呼ばれる広域自然保全地域の設定をめぐって、自然保護活動家や自然保護行政官らがその是非を活発に議論した。面積的に小規模な自然保護区を除き、土地開発や経済活動を制限しうる広域保全地域は、従来ドイツにはほとんど存在しなかった。このことは、戦後の急速な経済復興に伴い動植物相が損なわれることへの懸念、あるいは保養地整備への社会的需要が高まると、アメリカ合衆国などとの対比において後進的と認識されるようになったのである。一般市民をも巻き込んだ議論の結果として、1960年代末までに30以上の自然公園が西ドイツ各地に、さらに1970年には最初のナショナルパークがバイエルン州東部の森林地帯に、それぞれ設置された。本報告では、これら広域自然保全地域について展開された政治・社会的議論を、とりわけ森林利用のあり方をめぐって生じた様々な利害対立に焦点をあてて、詳述する。

1930年代イタリアの農村家族調査と農民観

山手 昌樹

本報告は、1930年代のイタリアで実施された農村家族調査を手がかりに、ファシズム農政を主導した農業経済学者アッリーゴ・セルピエーリの農民観を検討する。彼は当時、土地開発事業と自作農創出を推進しており、この政策に科学的根拠を与えるため、農村社会を対象とする様々な実態調査を指揮した。なかでもフランスの社会学者フレデリック・ル・プレの家族調査法に基づき実施された農村家族調査は、対象家族の経済的・社会的・文化的状況を詳細に報告しているが、そこからは農民の日常生活のみならず、調査員の農民観や家族観をもうかがい知ることができる。それでは彼らの農民観はどのような特徴を有していたのだろうか。報告では調査実施に至るまでに展開された議論に基づき彼らの問題関心を明らかにしたうえで、イタリア統一前後から第一次世界大戦前までに実施された同種の農村家族調査を参照しながら、ファシズム時代の農村家族調査に現われる農民観の解明を試みる。

1940-50年代の植民地アシャンティ（現ガーナ中部）におけるチーフと学校教育
中等学校プレンペ・カレッジの設置（1949年）をめぐって

桑島 穂

本報告では、1940-50年代のアシャンティにおいてチーフという職位が直面した危機を明らかにし、中等教育を通じてチーフの権限や資格が変化する過程を考察する。植民地ガーナの歴史研究において、初等教育は様々な角度から分析されてきた。人々の社会的地位を上昇させる手段として学校教育は社会に受容され、実際に初等学校の卒業者が新しい社会層として、脱植民地化までのナショナリズム運動の支持基盤となった。一方、植民地社会にとっての教育の意義を包括的に把握するためには、中等教育に対する需要が1940年代以降の当地に存在した実態を明らかにし、その社会的な背景を分析する必要がある。植民地改革が展望され、チーフが行政を担うことの是非、その適格性が当時の新聞記事や政府報告書の中で問われる中、アシャンティの新しい中等学校プレンペ・カレッジと中等教育は、チーフを中心とした当地の政治・経済・権力構造にどのような変化をもたらしたのだろうか。

アメリカ、イギリス、ドイツにおけるインド独立運動 —ディアスポラの貢献—

Pallavi BHATTE

インド独立運動の現実をディアスポラとトランスナショナリズムの枠組の中で考える。発表では英領インドの外にあって独立に貢献した活動家とそのイデオロギーを考察する。北米についてはサン・フランシスコにおける革命グループガダル党の活動家たちがどのように本国の運動に影響したかを考察する。さらにヨーロッパについては、ドイツにおいて共通の敵であったイギリスに対する独立計画が留学生の間でどのように形成されたかを史料に基づき考察し、北米・ヨーロッパ両地域でそれぞれに展開した運動が、密接に連動していたことを明らかにする。

冷戦初期のアメリカ合衆国の学術世界における「新秩序」の形成

藤岡 真樹

本報告は、冷戦初期のアメリカ合衆国の学術世界において、冷戦に対応した学知の再編がそれに抗する動きを孕みつつも進められ、やがて「新秩序」として現出するまでの過程を明らかにしようとするものである。

冷戦初期のアメリカの学術世界では、大戦期の戦時機関から研究者が大挙して大学に移動し、そこで新たな組織を立ち上げるといった再編が見られた。しかし、1940年代後半までの学術世界は、連邦政府への接近には慎重であり、他方の連邦政府も、大学との関係の緊密化に邁進したわけではなかった。しかしながら1950年代に突入すると、40年代に見られた双方の抑制的姿勢は薄れ、合衆国の冷戦政策を積極的に支えようとする「新秩序」が学術世界において誕生した。本報告は、1940年代後半から1950年代初頭のマサチューセッツ工科大学を対象に、こうした学術世界の歴史的動態の一端を実証的に解明しようとするものである。

1980年代におけるノッティングヒル・カーニバルの体制内化と移民コミュニティ —カーニバル発展委員会の活動を中心に—

稲垣 健志

現在、ヨーロッパ最大の路上イベントとして知られるイギリスのノッティングヒル・カーニバルは、1970年代においては、移民と警察の抗争の場であり、移民による対抗文化の実践の場であった。しかし、80年代になると、カーニバルは「多文化主義」の「売り」にするべく、体制内化されていくことになる。こうした変化は、移民コミュニティにいかなる影響を与えたのであろうか。管見の限りでは、このような文化の主導権をめぐる緊張状況の真っ只中に置かれた移民に焦点を当てた研究は極めて少ない。そこで本報告では、70年代後半から80年代初頭にかけてカーニバルの企画・運営に携わったカーニバル発展委員会(Carnival Development Committee)に焦点を当て、委員会が発行したパンフレットや、委員会と深く関わった人種関係協会(Institute of Race Relations)の機関誌などを手掛かりに、委員会によるカーニバルへの関与を継続的に考察し、国・行政と移民によるカーニバルの主導権をめぐる緊張関係に迫ってみたい。

小シンポジウム要旨

小シンポジウム1

日本の西洋古代史研究：回顧と展望
—独自性と国際性、貢献をめぐる—

企画責任者 南川高志

趣旨説明

南川高志

第二次世界大戦後、わが国の西洋古代史学界は長足の進歩を遂げ、さらに1990年代からは研究者・大学院生の留学や欧米研究者の来日が目立って増え、日本人研究者が欧文で研究成果を発表することも珍しくなくなるなど、高い国際性を獲得するようになった。一方で、他の西洋史の研究分野と同様、そうした国際性の獲得が、日本や東洋の学問としての「西洋史学」という意義に照らすと少なからず問題を孕んでいることも指摘されている。さらには、近年、人文系の学問も日本の教育や社会にたいしての具体的な貢献を強く求められるようになり、西洋古代史研究がこの課題にどのように対応するのか、考えられねばならない。本シンポジウムでは、こうした問題を念頭において、「国際性」、「独自性」、そして「貢献」を主要な論点としながら、1970年代以降のわが国西洋古代史学界の歩みを振り返り、今後の望ましい研究（そして教育など）のあり方を考えようとするものである。

報告1 日本における古代ギリシア史研究の現在

佐藤 昇

我が国のギリシア史研究は、近年、広義の政治史的視点に加え、社会、宗教、文化といった領域を重視する傾向にある。ポリス形成過程への関心は以前ほどの高まりを見せず、対照的に前4世紀、ヘレニズム世界を対象とする研究が増加傾向を見せる。現地調査の機会も増え、考古遺物や碑文現物を分析対象とする研究も増えつつある。他方、欧米で一定の成果を見せる経済史は、低調に見える。多様な広がりを見せる諸研究も、国内では史料のアクセスに困難を伴う場合が少なくなく、知見の深化、共有に困難を伴うこともある。改めて史料精読の重要性、加えてオンラインリソースの重要性も痛感させられる。他方、近年、社会的還元をめぐる提言が喧しい。国内における古代ギリシア史研究のプレゼンスを高めるのは、容易な作業ではない。まずは邦語、欧語で着実な専門研究を積み重ねることが肝要と考える。加えて、問題意識を共有する他分野への発信、専門研究をある程度理解する中間層の育成なども考えたい。

報告2 日本における古代ローマ史研究の現在

高橋亮介

我が国のローマ史研究は様々なテーマと史料を扱うようになってきているが、関心の焦点として、1) 古代ローマの特質に注目する政治史研究、2) 非「古典古代」的な要素を視野にいれ地中海世界を遠望する地域史研究、3) 「西洋史」の通時的な理解を深めると同時に、その枠組みを相対化する初期キリスト教・古代末期研究を指摘できるだろう。これらの関心は欧米学界のそれとも軌を一にし、今後も研究の高度・細分化と国際化が進むであろう。その一方で、研究成果の社会還元することへの要望も強まっており、史料翻訳・学界動向を含めた邦語での研究発表や様々なアウトリーチ活動の重要性は増えこそすれ減じることはないだろう。こうした活動も、研究者個人の関心に基づいてなされるべきだが、学界による共同作業も可能なように思われる。例えば、ローマ史の全体像の提示や特定のテーマをめぐる争点の整理といった作業は、教育や他地域・時代との比較史研究のために有効ではないだろうか。

報告3 欧米からみた日本の西洋古代史研究

藤井 崇

欧米の学界からみた場合、日本の西洋古代史研究のプレゼンスは高くない。教育面では、日本における西洋古代史の修士・博士課程は海外の学生を引き付けるものとはなっていないし、研究面では、その活動が世界レベルで話題になる研究者は数えるほどしかいないといっても差し支えないだろう。この状況は、日本の政治的・地理的・言語的環境の当然の帰結ではあるが、同時に、優れた先人が築き上げた日本語による学術システム（日本語で高度な研究活動と旺盛な一般書の執筆をおこなう大学教員と、彼らの成果を国内で受けとめる研究者集団と一般読者層）の成功がもたらした負の副産物でもある。報告者は、日本語による研究・教育活動を一方で堅持しながらも、他方で人材の環流、研究成果の公表等々の面で海外への貢献を意識した活動が今後必要になってくるのではないかと考える。また、学界外への貢献の点でも、欧州の各大学はさまざまな工夫をしており、その一部は日本での社会貢献の参考となりうる。

報告4 西洋古代史研究の貢献

長谷川岳男

西洋古代史研究者の間では、すでに長い間、社会的有用性や意義の面からこの研究分野の将来が危惧されているが、昨今のギリシア・ローマ史関係の展覧会の混雑ぶり、巷でのカルチャーセンターの講座、あるいはこの時代を扱った小説、映画、マンガ、さらにはテレビの特別番組の人気を見る限り、この分野に対する世間の関心の高さは疑いないであろう。ただ問題とすべきはその関心の対象は何か、という点である。それが既知のことの再確認、または現実ではなくロマンへの憧憬であることは明らかであり、西洋古代史研究の新たな成果ではないことを我々は直視すべきである。そして貢献という意味で、このような一般の人々の関心に対応するだけならば、古代史研究の社会的存在意義は消滅してしまう。そこで本報告では、なぜこのような関心の持たれ方しかされなくなってしまったのかの原因を問い、それを打開するために学界として取り組むべき姿勢は何かを提起したい。

コメント これからの「日本の」西洋古代史研究

南雲泰輔

我が国の西洋古代史研究は、欧米学界の動向と（多少の時間差はやむをえなかったにせよ）緊密な関係を保ちつつ、主として日本語によって専門研究の成果を蓄積してきた。その過程では、一方では研究の水準を欧米のそれと同等あるいはそれ以上のものとし、他方では西洋古代史研究を西洋ならざる日本において行なうことの意義を説明するという、時に互いに背馳するようにさえ感ぜられた国際性と独自性に関する二つの方針が、さしあたり学界全体で共有可能なものとして意識されていたように思われる。かかる従来の方針に対して、本シンポジウムを構成する四報告からは、研究成果の社会還元という観点を含め、我が国の西洋古代史研究が置かれた現状に即した、一層現実的・実践的な「目標」と称すべきものが醸成されつつあることを窺知しうる。すなわち、1) 我が国の西洋古代史研究の国内・国外における存在感をともに高めること、2) 西洋古代史研究の学界における最前線の知見を、日本の一般社会がより直接的に理解しうる状況を創り出すこと、の二点である。かかる目標を達成するために、今、われわれは何をなすべきであろうか。

小シンポジウム2

中世ヨーロッパにおける政治的コミュニケーションと秩序
— 境界地域から—

企画責任者 服部良久

趣旨説明

服部良久

本シンポジウムは「コミュニケーション」を「情報、観念、価値規範、意思、感情などの共有をめざす相互的な行為」と理解し、支配者、地域社会、諸集団の間の紛争状況における交渉とインタラクションを、政治的コミュニケーションのプロセスとして考察する。このプロセスは危機に瀕した秩序を回復し、また新たな関係を構築するが、権力関係の流動化と混乱の長期化を導くこともある。このようなコミュニケーションはあらゆる身分階層の活動空間において見られるが、本シンポジウムでは以下の4報告のように、緊張を孕んだ相互行為がより明確に現れるケース、すなわち異なる社会秩序、法的慣習、文化を持つ集団が接触する地域、二つの覇権的勢力の「境界」に位置する地域、また外部から来た支配層の下に、異なる宗教、言語、エスニシティの社会が置かれた歴史的状況に着目する。紛争収拾のための法制度的基盤の共有が難しい状況では、実行使の他、多様な相互行為・交渉が行われた。そのような地域・社会の秩序は権力、コミュニティの間の日常的な関係性と、そこから時に顕在化する紛争（反乱）及びその収拾の繰り返しのよう、動的、長期持続的なプロセスとして明らかにされねばならない。

報告1 1259年パリ条約以後王子エドワードのボルドー政策
— 領有者プランタジネット家と都市コミュニティのコミュニケーション—
朝治啓三

12世紀半ば以来、プランタジネット家が領有するガスコーニュ地方の中心都市ボルドーに市民のコミュニティが何時形成されたのかについて、先行研究の見解は一致していない。1235年前後から市民間に二つの党派が出来て、時には武力を用いて衝突した。アキテーヌ公としてのヘンリはセネシャルを派遣して紛争を仲裁し、一方の党派に特権を与えて市民統治の役務を代行させた。この為他方の党派は不満を持ち、1249年に武力蜂起してヘンリが最前線する党派を市外へ追放した。1259年パリ条約によって、ヘンリがアキテーヌ公としてカペー家のルイ9世に臣従した結果、カペー家は、現地住民へ支配を拡大する根拠を得た。一方ヘンリの息子エドワードは将来アキテーヌ公領がプランタジネット家の領有から離れることを恐れて、現地領主との間に封建契約を結び直し、ボルドーをはじめとする諸都市コミュニティの間にも臣従契約を結び始めた。本報告では、エドワードと市民コミュニティ間の帰属心をめぐる交渉を検討する。

報告2 13世紀アイスランド社会とノルウェー王権 — 忠誠と反逆の狭間で—
松本 涼

アイスランドは、13世紀初頭以降の内乱の激化の末、1262-64年に全住民がノルウェー王への臣従を誓約することより、自力救済的社会から王権支配へ移行したと考えられている。1262-64年の臣従契約は、王への忠誠はあくまで住民と王との合意に基づくという双務的な性格を示しているが、1270年代以降には、王を地上における神の代理人と位置づける新たな君主理念の下に、片務的な服従を臣民に求めるノルウェー宮廷と、在地の慣習維持を望むアイスランド住民（とくに上層農民）との対立が顕著となる。その最たる例が、1281年の全島集会における新法典の拒否と、ロプト・ヘルガソンという一住民が王への「反逆者」としてノルウェー宮廷へ召喚されるという事件である。本報告では、これらの事件のなかで王への忠誠義務にかんする認識の齟齬が表面化し、それをめぐる交渉の過程で、ノルウェー王と、その臣民となったアイスランド住民との関係が変化してゆく状況を考察する。

報告3 13、14世紀クレタにおけるヴェネツィア支配とギリシア人
— 「反乱」時代の秩序形成—

高田良太

第4回十字軍が東地中海世界に巻き起こした混乱のなか、クレタにおけるビザンツ帝国の支配は失われ、ヴェネツィアによる支配が始まった。本報告では、このヴェネツィアとクレタのギリシア人との相互関係を考える鍵として、「反乱」をとりあげる。13世紀から14世紀前半にかけては島西部の山間部においてギリシア人による対ヴェネツィア反乱が多発したことが知られている。とはいえ、これらの事件は必ずしも武力闘争のかたちをとっておらず、むしろヴェネツィア人とギリシア人の間で支配・被支配の関係が取り結ばれていく過程の一環であった。そして反乱の当事者となった山間部のギリシア人たちに目を向ければ、彼らはヴェネツィアの支配を前提としつつも、世俗的な勢力圏として、同時にまた教会の管区としても、ヴェネツィアの支配体制とは一線を画した独自の人間関係、すなわち「共同体」を形作っていった。このように、クレタにおけるヴェネツィア支配の確立は、支配者側が旧来の制度・慣習を駆逐しつつ島内に自らの影響力を浸透させていくといった一方的な図式のみでは捉えられない。新しい支配者と対峙・対話するなかで、非支配者側も支配の受け皿としての自らの輪郭をはっきりさせていったのである。

報告4 中世後期チェコにおける貴族共同体と「外国人」

藤井真生

14世紀初頭にスラヴ系のプシェミスル朝が断絶すると、チェコの貴族たちはドイツ皇帝ハインリヒ7世の息子、ルクセンブルク家のヨハンを新国王として迎えた。これ以降、帝国出身者の存在がプラハ宮廷では常態化する。その後、チェコの貴族たちは、1310年代、1350年代（ヨハンの息子カレル4世時代）、1390年代（孫ヴァーツラフ4世時代）に反乱を起こしたが、いずれも君主の取り巻きに対する反発が要因のひとつとして考えられる。反乱と前後して、ルクセンブルク家三代の国王は、外国人の重要官職登用を禁止する規定を發布している。これらの規定と貴族の反乱はいかなる関係にあるのだろうか。本報告ではチェコの貴族共同体と王家が対立と和解を繰り返しつつ、国政のあり方を定めていくプロセスを明らかにしたい。そのなかでも、「外国人」がいかに貴族共同体から排除されたのか、あるいは受容されたのか、という点に注目する。

小シンポジウム3

近世ヨーロッパにおける礫岩国家
—複合する政体、集塊する地域—

企画責任者 古谷大輔

趣旨説明

古谷大輔

近世ヨーロッパの政治秩序をめぐる近年の研究は、同時代の独特な言語空間のなかに、中世以来の伝統を踏まえた政治社会や、人文主義に培われた価値観を継承する政治思想のあり方を探求してきた。近世史研究の最前線は、「複合国家」や「普遍君主」などの分析概念を提示した近年の議論を踏まえつつ、近代主義の予見を排しながら近世国家そのものを熟考すべき地点に達している。同時にその作業は、世界史的な文脈において各文明圏にみられた政治秩序との比較研究への見通しももつべきだろう。本シンポジウムは、こうした研究史への認識に立ち、各地に独特な政治社会のニュアンスを踏まえた国家理解を深めるべく、ヨーロッパ東西南北に見られた国家編成の事例を比較する。各々の報告は、様々な形質をもった礫岩が固結してできる「礫岩」という地質学用語に準えながら、各地域が集塊する国家の輪郭をダイナミックに描き出すことを共通の目標としている。この作業を通じて本シンポジウムは、他文明圏の複合的な政治秩序と比較可能な分析枠をヨーロッパ史研究から発信する手がかりを探る機会ともしたい。

問題提起

礫岩国家と普遍君主

近藤和彦

近世を近代への前史/移行期としてとらえる進歩史観が批判されて久しい。ヨーロッパの16~18世紀とは宗教戦争、王位継承をめぐる係争、同君連合、主権国家、公共善、そして啓蒙の時代であったが、また各地で人文主義の政体・秩序論を継承しながら、それぞれの課題をめぐって議論が展開した。政治秩序に焦点を合わせてみるなら、注目されるのは「絶対王政の団体的編成」「信教国家」とともに、「複合君主制」「集塊」「礫岩国家」「普遍君主」といった概念である。本シンポジウムでは、こういった概念の研究史的な意義を確認し、この間のH.ケーニヒスパーガ、J.エリオット、J.ポーコック、J.モリル、二宮宏之などに領導されたヨーロッパ各地域の（またそれを越える）政治社会や思想の研究と議論をふまえて、現時点のパースペクティヴを呈示したい。J.フォーテスキューによる *dominium politicum et regale* という概念も再評価されるべきだろう。近世はまたヨーロッパが非ヨーロッパと交渉し、学ぶ時代でもある（*The world is not enough*）。より広い世界史的な適用の手がかりも得られるだろう。

報告1 礫岩国家スウェーデンと多様な地域集塊の論理
—スコーネ地方の併合にみる「バルト海帝国」の形成プロセス—
古谷大輔

近世スウェーデンは、バルト海世界における軍事的覇権をもとに、便宜上「バルト海帝国」と通称される広域支配圏を築いた。一般的に「バルト海帝国」はスウェーデンの軍事的保護を承認した福音主義ルター派を奉じる諸地域政体の複合体として理解されている。しかしバルト海東岸、フィンランド湾奥、ドイツ北部へ広がった支配圏に服属する地域政体は中世以来のスウェーデン国法を共有しなかったため、「バルト海帝国」における統治権力と服属地域の接合関係は一様ではなく、独自の秩序観を育んできた服属地域との交渉により多様なパターンで彩られていた。一つの複合的国家編成に多様な接合関係の併存を確認する際、長らくデンマークに属したスカンディナヴィア半島南端のスコーネ地方の併合過程は、16世紀後半から17世紀前半にかけての支配圏拡張の経験や大陸ヨーロッパの君主政体の情報を参照しながら、様々な接合関係の組替が試みられた点で興味深い。本報告では、スコーネ併合をめぐる王国政府と地域住民との交渉過程から、「バルト海帝国」の政治言説に保たれていた多様な地域集塊の論理を提示したい。

報告2 「君主のいない共和国」と礫岩国家
—17世紀イングランド・スコットランドの法の合同論をめぐる—
後藤はる美

近世イギリスにおける複合的国家編成は、1990年代以降、「ブリテン」あるいは、イングランド・スコットランド・アイルランドの「三王国」の問題として注目されてきた。本報告は、1650年代クロムウェル政権下で構想された、イングランド・スコットランドの法の合同論を手がかりに、君主のいない共和国という新体制による、礫岩国家再編の試みを検討する。両地域の法の合同は、1603年の同君連合の形成時より議論され、共和制下の数年間にのみ実行に移された。この同化計画は三王国の復古によって頓挫し、1707年の議会合同までに現実的選択肢から除外されてゆく。しかし、その交渉の過程では、両地域の法の独自性と正統性の意識が研がれ、各ネーションの歴史的アイデンティティに編み込まれていった。さらに、これらの議論がローマ帝国から東欧、北欧、スペインの合同まで、ヨーロッパ諸国の古今の複合政体の事例を参照し、一人の主権者と議会、各ネーションの特権と法の問題を論じたことは興味深い。本報告はこうした観点から、法の合同論の提起した問題をヨーロッパ的文脈に置き直し、近世史における複合国家論の射程を検証したい。

報告3 ハプスブルク帝国の礫岩国家編成と集塊理論
—非常事態への対応：服属地域ハンガリー王国からの正統化—
中澤達哉

近代歴史学において、長らくハプスブルク帝国は「近代国家形成の失敗例」と認識される傾向があった。しかし、複合国家論・複合王政論の登場に伴い、主権国家や国民国家とは異質な複合的国家形態を保持し続けた国家として、近年では逆に再評価される風潮がある。これに対して本報告は、16世紀ハプスブルク帝国の複合的国家編成が非常事態に対応して選択された現実主義的な礫岩国家編成であったことを、固有の国制的伝統を有する服属地域からの集塊理論を分析することで明らかにしたい。とりわけ、神聖ローマ帝国圏外のハンガリー王国がオスマン戦争期にいかにしてハプスブルク朝への（離脱や組替を含む）集塊を正統化しようとしたのか、1560-70年代の後期人文主義者の諸理論（オラフスの *sacra corona* 論、フォルガーフの *patria* 論、ラコキウスの *imperium* 論）を中心に検証する。その際、3者によるハンガリー王国内部の社団の集塊論をも検討する。これによって、君主と服属地域との間には、国家の集塊のあり方に関して複数の複雑な交渉が常に存在したこと、集塊の仕方が異なれば、国内の社団の集塊のあり方も必然的に相違したことを指摘したい。

報告4 王朝の交代と礫岩国家スペインの変質
—「新組織王令」にみるブルボン朝スペインの統治理念と実態—
中本 香

スペイン王国は、18世紀初頭のブルボン朝の成立を機に、ハプスブルク朝でみられた複合君主制としての国家編成から脱却すべく、中央集権的な統一国家の形成へと舵を切ったと言われている。この新たな統治システムへの変革は、1707-16年に順次制定された「新組織王令」と総称される一連の法令によって開始された。イベリア半島で内戦の様相を呈したスペイン継承戦争で、ブルボン王権に「征服された諸地域」へ公布された王令は、古くからそれら地域に保たれてきた独自の法制に基づく政治的な自立を原則的に無効とした。しかし実際には、征服地域の事情に応じて存続が認められた制度に違いがあり、これによって集権的な君主制国家への移行が完成されたわけではなかった。本報告では、この「新組織王令」を複合的国家編成から集権的国家編成への分岐点として強調するのではなく、ハプスブルク朝期から普遍王国を構築すべく掲げられていた制度一元化の理念の延長線上に位置づけながら、集権的統一国家の理念と複合的国家編成という実態との矛盾を制度的に解消する妥協の産物として読み直すことにより、その意義を再検討したい。

コメント 近世スペインにおける歴史意識研究の立場から見た礫岩国家研究
内村俊太

コメント 近世神聖ローマ帝国研究の立場から見た複合国家研究
洪谷 聡

小シンポジウム4

ヨーロッパ近代のなかのカトリシズム
—宗教を通して見るもうひとつの「近代」—

企画責任者 中野智世

趣旨説明

中野智世

本シンポジウムは、宗教という視角から「ヨーロッパ近代」を再検討しようとする試みである。中世・近世史とはことなり、近現代史研究において宗教はながらく看過されてきたテーマであった。しかし、頻発する現今の宗教問題を背景に、近年、近現代史においてもあらためて宗教への関心が高まっている。宗教的な価値規範や心性、宗教・宗派を基盤とする組織や人的結合は、近代社会においても政治や経済、社会を動かす中心的要素のひとつであり、宗教・宗派は、階級・ジェンダー等と並ぶ有用な分析カテゴリーであることが次第に認識されつつある。本企画は、こうした問題意識に立って、「ヨーロッパ近代」と宗教、とくに「近代」の対極に位置づけられてきたカトリシズムをとりあげる。教育（フランス）、労働（ドイツ）、政治（スペイン）といった多様な領域における個別の実証研究を通して、「世俗化」という物語の影で捨象されてきた、カトリシズムと近代との両義的関わりを探ることがねらいである。

報告1

公教育のなかの宗教
—19世紀フランスにおける女性教員の養成をめぐる—

前田更子

公教育と宗教、この二つを共に語ることは可能なのか。19世紀末に公立学校から宗教的な要素を取り除くことで、すべての子どもに均一で平等な公教育を施す制度を完成させたフランスにおいて、公教育と宗教は相容れない関係にあると理解されるのが一般的だろう。しかし現在、こうした公教育観は揺らぎつつある。本報告では、教員の約半数が修道士・修道女であった19世紀半ばにおいて公教育とは何だったのか、という問題を考えたい。考察の対象としては、女子師範学校・講座を選択する。これらの施設は国や県、市町村だけでなく、修道会、民間団体によって共同で支えられていた。そしていずれの施設でも宗教的価値規範が生活・教育の中心に据えられていた。師範学校の校長の演説や生徒への手紙を通して、まずは当時の世俗の女性教員に必要とされた資質、職業意識の有り様を探る。次いで、教育を通じて発揮されることが期待された宗教の社会統合の機能、宗教教育を施す学校の公共性について考えてみたい。

報告2 19世紀末ドイツのカトリック労働運動 —階級と信仰のあいだで—
尾崎修治

本報告は、従来、経済的利害や階級などの枠組みでとらえられてきた労働者の運動を、宗教や宗派による結びつきという視点を加えて再検討する。プロテスタントとカトリックが拮抗していたドイツでは、労働運動においても、宗派の違いはきわめて重要な意味をもった。具体的には、社会民主主義運動がプロテスタント労働者に浸透した一方で、カトリック労働者の大半は同運動に距離をおき、「カトリック労働運動」という独自の運動を形成した。彼らは、世紀末の労働争議を通じて労働者固有の利害への意識を高めつつも、「階級」による連帯より、「宗派」の結びつきを優先した。その背景を考察するため、本報告は、このカトリック労働運動の中核を担ったルール地方のカトリック鉦夫に注目する。彼らにとって、聖職者をはじめとするカトリック世界（カトリック・ミリュー）との結びつきが、信仰の拠りどころであったと同時に、鉦夫運動とその組織を支える不可欠のネットワークであったことを明らかにしたい。

報告3

20世紀前半スペインにおけるカトリック的集合心性を考える
—青年平信徒のプロソポグラフィから—

渡邊千秋

社会の脱宗教化に対抗し信仰に従って行動する青年信徒の育成は、20世紀前半のスペイン・カトリック教会にとっての必須課題であった。そして、教皇庁の命を受け1920年代に展開した「カトリック・アクション」は、将来的に社会を担う青年層の「再キリスト教化」のための事業となったのである。本報告では、復古王政—独裁—第二共和政—内戦—独裁、と激動する1920-30年代に「カトリック・アクション」での経験を共有した青年平信徒が受容した思想・言説をとりあげつつ、プロソポグラフィの手法を援用して彼らの人格形成過程や政治的思考を跡付ける。従来「カトリック」というラベリングに終始しがちで実体が不明瞭であったカトリック的な青年層の中にみられる、ある種の多元性をもった世界観を浮かび上がらせたいと考える。またスペイン内戦以前に青年期を迎えた世代のカトリック的集合心性を再構築することを試みながら、あらためて集合心性を論ずる上での方法論的な課題を提示したい。

コメント1 イタリアにおける国家教会関係史研究とカトリック運動史研究の視点から

村上 信一郎

イタリアにおける研究の歴史を回顧しつつ、各報告についての感想を述べるとともに今後の展望を一緒に考えてみたい。

コメント2 「世俗化」史観の再検討 —フランス近世史からの眺望—

深沢克己

三報告による問題提起とその研究史上の射程について論評しながら、近代社会形成とカトリック教会との関わりを、多元的な視点から再考してみたい。

小シンポジウム5

市民の自分史
—前世紀転換期から戦間期のエゴドキュメント—

企画責任者 榎原 茂

趣旨説明

榎原 茂

19-20世紀転換期の前後、初期的グローバリゼーションが進行する一方で、帝国主義的対抗と国民統合の進展、社会主義勢力の台頭などにより、シティズンシップ（市民の権利や資格、アイデンティティ）がさまざまに問い直された。そして、リテラシーと遠隔コミュニケーションの発達により民衆層における社会的・文化的自己認識も組み直されるなか、多様な関係性のなかで「自分」を語った手紙、日記、回想録、自伝などエゴドキュメントが大量に生み出された。

本シンポジウムは、これらの史料をシティズンシップと関連させて読解しようとする。その際、エイジェンシー論から示唆を受け、エゴドキュメントの語りを個人のパフォーマンスの一環として捉えようとする。別言すれば、「一人称の語り」とそれをめぐる関係・共同性がどのように彼・彼女らのアイデンティティをかたちづくり、公共圏と向き合わせたのかに着目したい。それは同時に、彼・彼女らに応答する私たち自身への問いにも連なることになるだろう。

報告1 境界に立つ市民としての矜持と限界

—ユダヤ人家族を持ったアーリア人作家ヨッヘン・クレッパ（1903-1942）—

長田浩彰

1903年にドイツ東部、ポイテンの牧師家庭に生まれたヨッヘン・クレッパ。彼は、大学で神学を学ぶが、父の跡を継がず、作家・ジャーナリストの道を選んだ。31年3月にクレッパが伴侶に選んだ女性は、ヨハンナ・シュタイン＝ゲルステル(1890-1942)。彼女は、ニュルンベルクのユダヤ人家庭出身で、ユダヤ人弁護士と結婚して2女を得たが死別し、クレッパとは再婚であった。ユダヤ人を家族とするクレッパは、プロイセン国王を題材とした歴史小説『父』(1937)の成功で、第三帝国下でも執筆活動を何とか継続できた。38年11月の「水晶の夜」ポグロム以降、夫妻は、娘の出国に奔走し、翌年5月に、娘の1人はイギリスに亡命できた。強制離婚計画が進行中だと内相フリックから聞かされ、妻と義娘の強制収容所移送が現実のものと感じられる中、1942年12月10日夜、3人は睡眠薬とガスで命を絶った。本報告は、クレッパの日記を主な史料とし、彼の「シティズンシップ」をその中から読み取っていく。

報告2 世紀転換期フランスにおける聖職者の市民意識と自分史
—ピエール・ダブリ(1864—1916)—

長井伸仁

近代フランスの国民共同体(ネイション)が共和主義を軸に形成されるなかで、カトリック教会はその周縁部に位置せざるをえなかった。だが、教会のなかにも共和政や近代社会を受容しようと模索し、そのためにシティズンシップをめぐる葛藤を強く感じた人びとがいた。本報告は、そのような人物のひとり、ピエール・ダブリを取りあげる。アヴィニオン司教区の司祭であるダブリは、パリで近代的な神学や民主的な政論にふれた後、ジャーナリストとしてカトリック系新聞を渡り歩く。そのなかで特定の党派に肩入れする言動を繰り返したため、教皇庁から警告を受け、いったんは服従するものの、1910年に聖職を離脱した。報告では、論説や著作、さらには回想録『わが宗教体験』を読みこむことで、ダブリが共和政や民主政をどのように認識していたのか、また、聖職者として「私」を語ることにいかなる困難を感じていたのかなどを考察したい。

報告3 20世紀初頭アメリカ合衆国における女性労働者の組織化
—ローズ・シュナイダーマン(1872—1972)のシティズンシップ観—
寺田由美

本報告では、労働組合活動を通じて集団的アイデンティティに基づくシティズンシップの獲得を目指し、20世紀アメリカ社会の構造のなかへ組み込まれていこうとした労働者のあり方を、ローズ・シュナイダーマン(1872—1972)というひとりのユダヤ系アメリカ人女性を軸に検討する。特に、シュナイダーマン自身が「自らの歴史(my own story)」にとって重要な転機と述べる女性労働者を中心とした大ストライキ(1909—10)とトリアングル火災(1911)を軸に、労働組合の承認と立法による規制が、シュナイダーマンをはじめとする20世紀初頭のアメリカ社会を生きる非熟練労働者であり、かつ女性で、同時にその多くが移民である人々にとってどのような意味をもっていたのかを考察する。またこの過程で、個と集団の関係や、20世紀初頭のアメリカ社会の編成原理についても考えてみたい。

報告4 「農民」と「市民」のあいだ
—ブルボネの農民、ジュール・ルージュロン(1861—1945)と共同性—
榎原 茂

本報告では、フランス中部ブルボネ地方のコミューン、ドメラのぶどう栽培農ジュール・ルージュロンの手紙を主な史料として、20世紀初頭の農村における共同性の変容とシティズンシップについて考察する。ルージュロンのエゴドキュメントからは精力的な農村改革者、名士層への批判者の像が立ち現れるが、その活動は一方で村の共同性に亀裂を走らせることになった。1908年に彼が創設した協同組合ラ・リューシュ・ヴィティコルは、コミューンから借地した共同地でブドウ栽培をおこない、その収益を農業改良や文化事業に役立てようとした。ダニエル・アレヴィイによって「共産主義的ブドウ園」とも評されたこの企てはしかし、村人たちの反発を買い、シャリヴァリの標的ともなった。

この共同地問題に関するさまざまな語りとメタ・ヒストリーを重ね合わせながら、ルージュロンの語りによって捉え返される共同性が、彼のシティズンシップ(市民的アイデンティティ)の基盤になっていたことを確認したい。

コメント1 ソ連史の立場から 松井康浩

ソ連史の文脈でエゴドキュメント研究を主導したJ・ヘルベックは、1930年代の日記を分析することでスターリニズムに一体化する主体を析出し、西欧的理念型とは異なる「市民」像を提示した。他方、ソ連市民による「自分史」に注目した討論者は、トロツキー派に与したために3度の逮捕と収容所送りを体験しつつも生き残り、スターリン死後に釈放されたユダヤ系ソ連人M・バイタルスキーの自伝的回想録を読む機会を得た。近代的な市民意識の根底にある「人間の尊厳」を打ち砕いたスターリニズムを批判した彼は、同時に、彼のいう「人間の尊厳」がユダヤ人としての「民族的尊厳」とも深く結びついていることを強調した。つまり、市民なる存在が、無色透明な、文化的属性を脱色したものではなく、ナショナルな背景を伴うことに力点を置いたのである。討論では、市民的主体形成にあたっての民族やネイションのファクターについて掘り下げてみたい。

コメント2 「市民の自分史」と歴史学の方法 小田中直樹

本シンポジウムを歴史学の方法という観点から評価するに際しては、歴史理論としての「市民」と、歴史学方法論としての「自分史」という二つの次元を区別することが有効である。

第一に「自分史」についてであるが、ポスト言語論的転回の時代における資料処理の方法として「ズレ」に着目するというものがある。そしてエゴドキュメントには、「自分を語る」という特質からして、ズレを析出しやすいという長所がある。第二に「市民」についてであるが、本シンポジウムの特徴は、市民の生成プロセスにおいて「独学」とりわけ「書くこと」を重視する点にある。これは、既存の研究では相対的に軽視されてきた観点である。

本コメントでは、上記の二点を研究史に即して詳説するとともに、これらを実証基準として諸報告を評価することにより、議論に資することを試みたい。

小シンポジウム6

第一次世界大戦再考

企画責任者 小関 隆

趣旨説明

小関 隆

本シンポジウムの趣旨は、開戦100周年を間近に控えた第一次世界大戦の歴史的意味を再考することにある。「現代世界の起点」とも呼ばれるべき出来事であった大戦を、本シンポジウムでは、「世界性」、総力戦、「芸術」の変容、未完の戦争、という4つの切り口から検討する。

報告1 「世界性」認識と学知の転回

山室信一

1914年に勃発した戦争は、世界各地から兵士が動員され、戦場もヨーロッパ外にまで広がったことによって「世界性」をもつ「大戦」となった。果たして、「世界性」を有したことをもって、この戦争の歴史的初発性に注目することに如何なる意義を見出すべきなのだろうか。そして、日本人がこの「欧洲戦乱」を逸早く「世界大戦」と名付けたのは、日本の周辺性を示すだけのことに過ぎないのであろうか。さらに、そもそも「世界性」とは何を意味するのであろうか。本報告は、「世界は一つであるが故に世界である」「世界は多様であるが故に世界である」という2つの全く相反する見方が第一次世界大戦を契機として浮上してきた意味合いを、多様な学知の展開の中に探るものである。それによって世界認識と自己認識をめぐる日本の歴史学・政治学・法学・文学などの研究視角や方法論が、いかに変化し、現代に繋がる転回点となったのかについて論じてみたい。その課題は「近代」と「現代」との境界の意味を考えることに重なるはずである。

報告2 総力戦を生きのびる

藤原辰史

第一次世界大戦は人類史上最初の総力戦である。狭義の軍事力のみならず、政治力、経済力、科学技術力を含めた国家の総合力が戦争の帰趨を決めたからだ。様々に論じられてきた総力戦の様相を、本報告では、戦争を「生きのびる」という視点から整理してみたい。「生きのびる」ことが前線で戦闘行為に従事する兵士にとって最大の課題であったのはいうまでもないが、食糧危機やスペイン風邪の流行に見舞われた銃後においても「生きのびる」ことは切実な問題であった。市民社会総体が生命の危険に接したとき、民衆、地域、国家はどのような対応をし、その経験は戦後にどのような痕跡を残したのか。とりわけ、生活環境が厳しくなるなかで、食料や燃料を確保しながら、子どもを出産し、育てる女性たちの戦争体験はどのようなものであったのか。その女性たちの戦争体験は、夫や兄弟のそれとどのように共鳴し、そのあいだにどのような断絶が生まれたのか。主としてドイツを事例としながら、考えてみたい。

報告3 第一次世界大戦と「芸術」の変容

岡田暁生

第一次世界大戦は近代芸術の終焉を告げる破局であり、永続性、自律性、エリート性、有機体美学、あるいはベンヤミンのいうオーラといった価値観は、大戦を境にしてほぼ全面的に否定されるようになった。もちろん、「芸術の変貌」の兆候は大戦以前にも現れており（例えば、ストラヴィンスキー『春の祭典』は1913年初演）、「大戦によって芸術が変わった」といった単純な因果論的見立ては出来ない。先行的に始まっていた芸術史の変化が大戦が決定的に方向づけたのか。社会に充満していた何かは早くも芸術の中に終末幻想として記録されており、それが大戦という形で現実化されたのか。それとも芸術史と大戦とは、直接的な因果関係で結びつけることは出来ないが、それだけに一層意味深い照応を示していると思われるか。本報告では芸術史を大戦と関係づけるいくつかのモデルの可能性について、「芸術における野蛮化」「芸術の政治動員」「芸術における技術の露出」「ブルジョワ芸術からの切斷」などを切り口として、考えてみたい。

報告4 未完の戦争：東部戦線によせて

野村真理

本報告では、「未完の戦争」と呼ばれる第一次世界大戦が完了へと至る様相が、西部戦線と東部戦線とで決定的に異なることを明らかにする。西部戦線に着目するかぎりでは、国民国家防衛のための総力戦という言い方も可能だが、例えばロシア軍、オーストリア＝ハンガリー軍の双方に動員されたポーランド人やウクライナ人あるいはユダヤ人には防衛すべき国民国家は存在しなかった。東部戦線で国民国家らしきものが輪郭を現すのは1918年10月になってからであり、西部戦線で戦火が止むのと時を接して、ポーランド人とウクライナ人が、リトアニア人とポーランド人が争い、ポーランド軍とソ連軍が一進一退を続けた。第一次世界大戦が引き起こした国民国家形成へ向けての地殻変動は、第二次世界大戦と1991年のソ連とユーゴスラヴィアの解体を経てようやく完了した。しかし、諸民族が混住するこの地域での地殻変動は住民の追放や強制移住を伴い、いかなる線引きによっても囲い込むことが不可能なユダヤ人は姿を消されたのである。

コメント1 アメリカ史の視点から

中野耕太郎

コメント2 ジェンダーの視点から

林田敏子

« Athena Sources in the History of World War I »

史上かつてない規模と様相を呈した第一次世界大戦の開戦からおよそ100年。この戦争を伝えた資料を順次復刻刊行！
それぞれ異なる視点や論点から編集されているイギリスの報道資料4点をラインナップ。

The Illustrated War News (1914-1918) 8回配本 全16巻

あのイラストレーテッド・ロンドン・ニュースが出した戦争特集の週刊誌。特派員が戦場で取材した写真のほか世界中から伝わるニュース、地図、戦争画を大量に掲載。貴重な全号揃い。

Part 1: Volumes 1-2 (12 August 1914- 20 January 1915) ・ ISBN 978-4-8630-152-5 ・ 2013年9月 ・ 定価 (本体95,000円+税)

Part 2: Volumes 3-4 (27 January 1915- 7 July 1915) ・ ISBN 978-4-8630-153-2 ・ 2014年4月 ・ 定価 (本体95,000円+税)

以降続刊

The "Manchester Guardian" History of the War (1914-1920) 全9巻

現在のガーディアン紙直系の戦争特集。半年ごとにレビューする形態で編集された各巻で構成、テーマごとに整理された記事内容。戦後処理の状況まで伝える。各巻インデックス付き。写真多数。

ISBN 978-4-86340-148-8 ・ c. 3300 pp. ・ 定価 (本体 270,000円+税、分売設定あり)

*****シリーズ続刊*****

2014年予定

The War Illustrated: Album de Luxe (1915-1919) 全10巻 ・ ISBN 978-4-86340-160-0 ・ c. 3900 pp. ・ 予価 (本体285,000円+税)

もともとデイリー・メールの出版グループが1914年夏から出した安価な大衆向け週刊誌。大量の図版が人気を呼び、愛蔵版として再編集されたもの。

2015年予定

The Great War ... I was There! (1938-1939) 全6巻 ・ ISBN 978-4-86340-161-7 ・ c. 2300 pp. ・ 予価 (本体168,000円+税)

大衆紙デイリー・メールの出版グループから出された個人の戦争体験談。週刊全51号。著名人も多数。

Alfred Franklin **La vie privée d'autrefois**

【パリの私生活—12~18世紀のしごと・流行・慣習】

Arts et métiers, modes, mœurs, usages des Parisiens du XII^e au XVIII^e siècle

12世紀から18世紀までのパリ住民たちのしごと、流行、風俗、慣習をまとめ上げた、アルフレッド・フラン克蘭の大著。全27巻のうち補遺的な第2シリーズ4巻を除いた、第1シリーズ23巻をテーマごとにまとめて復刻。

Part 1: 服飾と「消費文化」 5巻+別冊解説：徳井淑子 (お茶の水女子大学教授) ・ ISBN 978-4-86340-102-0 ・ 定価 (本体 75,000円+税) 既刊

Part 2: 料理と食事 4巻+別冊解説：平野隆文 (立教大学教授) ・ ISBN 978-4-86340-103-7 ・ 定価 (本体 60,000円+税) 既刊

Part 3: 学校と子ども 3巻+別冊解説：宮下志朗 (放送大学教授) ・ ISBN 978-4-86340-104-4 ・ 定価 (本体 45,000円+税) 既刊

Part 4: 衛生、医療 5巻+別冊解説：松村博史 (近畿大学准教授) ・ ISBN 978-4-86340-105-1 ・ 定価 (本体 75,000円+税) 2013年11月

Part 5: さまざまな日常 6巻+別冊解説：福井憲彦 (学習院大学長) ・ ISBN 978-4-86340-106-8 ・ 定価 (本体 90,000円+税) 2014年予定

American Department Store and Mail Order Catalogues, 1870-1940

【アメリカ通販カタログ 1870-1940】

アメリカのデパートや通販会社の商品カタログを復刻。消費文化、生活文化の貴重資料。完結。

Part 1: Department Store Catalogues 1870-1915 ・ ISBN 978-4-86340-061-0 ・ 定価 (本体152,000円+税) 既刊

Part 2: Mail Order Catalogues 1915-1930 ・ ISBN 978-4-86340-062-7 ・ 定価 (本体198,000円+税) 既刊

Part 3: Mail Order Catalogues 1930-1940 ・ ISBN 978-4-86340-063-4 ・ 定価 (本体238,000円+税) 既刊

『第63回日本西洋史学会大会 プログラム・要旨集』

2013年5月11日発行

編集・発行

第63回日本西洋史学会大会準備委員会

〒606-8501 京都市左京区吉田本町

京都大学大学院文学研究科

西洋史学研究室内

FAX : 075-753-2719

(日本西洋史学会大会準備委員会宛て
と明記してください。)

E-Mail : seiyousi@bun.kyoto-u.ac.jp

Athena Press

株式会社 アティナー・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

TEL. 03-3946-2117 FAX 03-5977-8026

www.athena-press.co.jp
eigyo@athena-press.co.jp

オックスフォード ブリテン諸島の歴史 全11巻

イングランド一国史観をのりこえて、イングランド・ウェールズ・スコットランド、アイルランドの諸地域の総合的関係を視野に収めたはじめての通史。政治史のみを追うのではなく、文化・経済・社会・宗教など様々な視点からそれぞれの分野の研究者が専門的知識を展開。

- 第1巻 ローマ帝国時代のブリテン島 5040円
 - 第2巻 ポスト・ローマ 5040円
 - 第4巻 12・13世紀 1066年～1280年頃 6090円
 - 第5巻 14・15世紀 5040円
 - 第6巻 16世紀 1485年～1603年 5040円
 - 第9巻 19世紀 1815年～1901年 5040円
- 〔以後続刊〕
- 第3巻 ヴァイキングからノルマン人へ 7巻 17世紀
 - 第8巻 18世紀 1688年～1815年
 - 第10巻 20世紀 1901年～1951年
 - 第11巻 20世紀 1945年以降
- 〔体裁〕A5判・上製・カバー装 頁数1360～600頁
本体予価14800～58000円(税別)

女王陛下は海賊だった

櫻井正一郎著

●私掠で戦ったイギリス 女王もドレイクも英雄ではなかった。一次資料を駆使して、息詰まる史上最大の掠奪を活写する意欲作。 2940円

複合国家イギリスの宗教と社会

岩井 淳編著 ●ブリテン国家の創出 イングランド中心史観を排し、新たな視座から描き出す、多様なブリテン複合国家の実相。 5775円

イギリス摂政時代の肖像

Cエリックソン著
古賀秀男訳

●ジョージ四世と激動の日々 ナポレオン戦争による社会不安で揺れ動いた摂政時代の内幕を臨場感豊かに描き出す。 4725円

麻と綿が紡ぐイギリス産業革命

竹田 泉著 ●アイルランド・リネン業と大西洋市場 なぜ毛織物の国に綿業が興隆したか。従来のイギリス綿業史研究に新たな解釈を示す。 6300円

50のドラマで知るドイツの歴史

マンフレッド・マイ著 小杉尅次訳 ●祖国統一への道 民族大移動からベルリンの壁崩壊を経て、東西再統一に至るドイツ史の光と影とは。 3675円

ドイツ帝国の成立と東アジア

鈴木楠緒子著 ●遅れてきたプロイセンによる「開国」 従来の研究の枠を越え、よりグローバルな視角から捉え直す、ドイツ統一国家の形成過程。 6300円

アウトバーンとナチズム

小野清美著

●景観エコロジーの誕生 自然との融和を唱え、景観形成に活用されたアウトバーン建設の展開を技術者の視点から分析する。 予価4725円

アメリカ労働民衆の歴史

野村達朗著

●働く人びとの物語 白人や黒人、移民、女性など「働く人びと」が紡いできた歴史の歩みを辿り、民衆の視点から「アメリカ」を捉え直す。 3675円

歴史哲学への招待

小林道憲著

●生命パラダイムから考える 生命パラダイムから歴史をどう見るか、その見方を問い直す。歴史を「内から」見る歴史哲学へと誘う書。 3150円

バロックの王国

ハプスブルク朝の文化社会史 1550-1700年
R・J・W・エヴァンズ著／新井皓士訳 バロックとカトリシズム興隆の時代へと中欧の姿が大きく変容する17世紀。政治、社会、文化的織糸が複雑に絡み合いながら、ドナウの国々は統一国家へと結束する。およそ600年続いたハプスブルク王朝の基礎を築く時代の深奥を、中欧歴史研究の碩学、R・J・W・エヴァンズが精緻に描く。 9975円

幸福の追求

イギリス領植民地期アメリカの社会史
ジャック・P・グリーン著／大森雄太郎訳 アメリカ歴史学界の泰斗ジャック・P・グリーンによる、植民地時代アメリカを包括的に分析した画期的著作の待望の邦訳。アメリカは迫害を逃れたピューリタンの創った国であるという安易なアメリカ史のイメージを覆し、ニューイングランドピュリタニズム中心史観への強烈なアンチテーゼを提示する。 3990円

ライマン・ホームズの航海日誌

ジョン万次郎を救った捕鯨船の記録
川澄哲夫 翻訳・註 1841年、漂流中のジョン万次郎ら一行を救助したアメリカの捕鯨船「ジョン・ハウランド号」の乗組員であったライマン・ホームズという若き水夫が記した航海日誌。2000年に米国で発見された日誌を完全翻刻し、英和対訳版として刊行。カラ1口絵や当時の捕鯨船の詳細な図・解説なども収録した愛蔵版。 15750円

15のテーマで学ぶ中世ヨーロッパ史

堀越宏一／基野尚志編著 ヨーロッパ文明の起源を探る。 3675円

はじめて学ぶイギリスの歴史と文化

指 昭博編著 多彩なトピックとともに明快に解説する。 2940円

近代イタリヤの歴史

北村暁夫／伊藤 武編著 ●16世紀から現代まで 欧州世界の縮図としての多様性。 3360円

20のテーマで読み解くアメリカの歴史

鷲尾友春著 ●1492～2010 4410円

近代ヨーロッパの探究

望田幸男／村岡健次監修 A5判上製

⑭ 鉄道

湯沢 威／小池 滋／田中俊宏／松永和生／小野清之著 鉄道はその伝播、浸透によって社会や人々にどのような影響を与えたのか。鉄道Ⅱ近代文明のもつ「光」と「影」を読み解く。 5250円

⑮ 福祉

イギリス、フランス、ドイツ、スウェーデン、イタリア、ロシアを対象に、「福祉の複合体」の歴史的ダイナミズムを描き出す。 5250円

シリーズ既刊

① 移民

山田史郎ほか著 ● 200円 若尾祐司編著 ● 200円 有賀都敏ほか著 ● 400円 深沢五郎編著 ● 400円

② 民族

大津留厚ほか著 ● 400円 橋岡とし子ほか著 ● 400円 阪口修平ほか編著 ● 400円 林田孝ほか編著 ● 400円

③ 家族

河野真太郎著 ● 6825円

④ スポーツ

自由の条件とは何か 1989～1990 C・V・ヴァイツェッカー著 ● 4200円

⑤ 国際商業

ドイツ正統史学の国際政治思想 大原俊一郎著 ● 見失われた欧州国際秩序論の本流 7350円

⑥ 警察

ドイツ社会保障の危機 G・A・リッター著 竹中 亨監訳 ● 再統一の代償 8400円

西洋の歴史 基本用語集 古代・中世編 朝治啓三編 基本的な用語を983項目を収録。 2310円

西洋の歴史 基本用語集 近現代編 望田幸男編 人名343項目、事項610項目収録。 2100円

CAMBRIDGE

新ケンブリッジ版

アメリカ外交史 全4巻

The New Cambridge History of American Foreign Relations 4 Volume Set

4 Volume Set May 2013 1264 pages Hardback 978-1-107-03183-8 US\$180.00

General Editor: Warren I. Cohen, University of Maryland, Baltimore County

Incomparable in its depth, scope, and insight, *The New Cambridge History of American Foreign Relations* explores America's past via the unique perspective of America's connections with the rest of the world. Organized chronologically from the country's founding to the present, each of the four volumes is written by a leading historian. With the Cold War nearly a generation behind us and new world orders emerging, *The New Cambridge History of American Foreign Relations* is a valuable tool for understanding the roots of America's past and present role in the world.

Series: The New Cambridge History of American Foreign Relations

個別の巻でもお求めいただけます。

Volume: 1 Dimensions of the Early American Empire, 1754–1865

By William Earl Weeks

Volume: 1 February 2013 336 pages Hardback 978-1-107-00590-7 US\$50.00

Volume: 2 The American Search for Opportunity, 1865–1913

By Walter LaFeber

Volume: 2 May 2013 272 pages Hardback 978-0-521-76752-1 US\$50.00

Volume: 3 The Globalizing of America, 1913–1945

By Akira Iriye

Volume: 3 May 2013 272 pages Hardback 978-0-521-76328-8 US\$50.00

Volume: 4 Challenges to American Primacy, 1945 to the Present

By Warren I. Cohen

Volume: 4 May 2013 384 pages Hardback 978-0-521-76362-2 US\$50.00

*円価格のお問合せ、ご注文は洋書取扱書店までお願いいたします。

Cambridge Books Online EXCELLENCE IN E-PUBLISHING

Cambridge Books Online (CBO) はケンブリッジ大学出版局の電子ブックオンラインの本棚です。歴史を動かした有名な著書も多く、1935年以降に出版されたほぼ全タイトルを取り揃える商品です。

- * 2013年現在約16,000タイトルを収録
- * 毎月、月の初めにタイトルを追加
- * 人文・社会・自然科学、医学の全ての分野をカバー
- * 1840年代からのタイトルも収録
- * 新刊と電子ブックをほぼ同時刊行

ご購入機種のサイズとタイプに基づいた価格設定となります。

COB Textbook もございます!

- * 2013年現在約4,000タイトルの教科書
- * 同時アクセス5人まで

30日間の無料トライアルにお申込み頂けます。価格・詳細については、洋書取り扱い書店までお問い合わせください。

Cambridge Histories Online BRINGING WORLDWIDE HISTORY TO LIFE

歴史学の定番レファレンス『Cambridge Histories』シリーズが、オンライン版になりました。1960年以降に出版された300巻以上が15の学術分野に渡り収録されており、そのデータ量は230,000ページ分にも及びます。また、既に絶版となっている貴重な資料も含まれています。検索やパーソナライズ機能などの様々な充実した機能を通して歴史学の学術資料がよりアクセスしやすいものとなり、歴史学に関連した幅広い分野の学生や研究者に最適です。毎月、内容が更新されます。

販売体系

- * 1年目パッケージ+2年目以降のアップデートパッケージ又はプラットフォーム費用
- * 大学単位 (FTE: 学生数+教員数)

* 2年目以降はプラットフォーム費用が発生いたします。

Cambridge University Press Japan

〒140-0002 東京都品川区東品川1-3-2-5

Tel: 03-5479-7295 Fax: 03-5479-8277 E-mail: japanacademic@cambridge.org

< 著作権、翻訳に関するお問い合わせもお気軽にどうぞ >

■「長い19世紀」における学術資料のデジタル・アーカイブ

GALE
CENGAGE Learning

19世紀コレクションオンライン版 Nineteenth Century Collections Online (NCCO)

Nineteenth Century Collections Online (NCCO)は壮大な学術的デジタル化プロジェクトです。いわゆる「長い19世紀」における広範囲な一次史料について収録コンテンツを検索可能にします。これまで入手が困難であった一次史料が、多様な特徴的なコレクションとして収録されております。英語を中心に非西洋語をも含めた書籍やモノグラフ、新聞、雑誌はもちろん、日記や手紙、マニユスクリプト、写真、パンフレット、そして地図や統計など、収録内容も多岐に及びます。



2012年リリースのアーカイブ・コレクション 好評発売中!!

Archive 1: 英国の政治と社会 British Politics and Society

Archive 2: アジアと西洋: 外交と文化交流 Asia and the West: Diplomacy and Cultural Exchange

Archive 3: 英国の演劇・音楽・文学 British Theatre, Music, and Literature: High and Popular Culture

Archive 4: コルヴァイ城所蔵コレクション: ヨーロッパの文学 Corvey Collection of European Literature

2013年リリースのアーカイブ・コレクション リリース開始!!

Archive 5: ヨーロッパとアフリカ Europe and Africa: Commerce, Christianity, Civilization, and Conquest

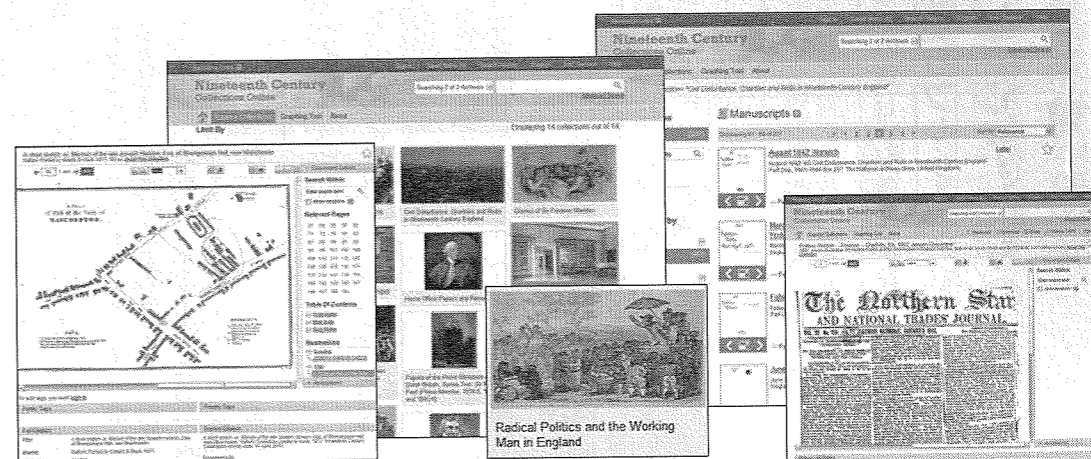
Archive 6: レンズを通じて見た19世紀世界 Photography: The World through the Lens

Archive 7: 科学・技術・医学の歴史 History of Science, Technology, and Medicine, 1780–1925

Archive 8: 女性: 国境を越えたネットワークの形成 Women: Transnational Networks

2014年以降もさらなるアーカイブ・コレクションのリリースが予定されております。

非西洋地域・非西洋言語まで広がるコレクションの形成を想定した壮大な学術的デジタル化プロジェクトです。



19世紀研究に大きく寄与するデジタル・アーカイブをぜひお試しください
無料トライアル実施中!! 詳しくは弊社までお申し付けください



極東書店

〒101-8672 東京都千代田区三軒明2-7-10 帝部三軒ビル Tel: 03(3265)7531 FAX: (3556)3761
http://www.kyokuto-bk.co.jp E-mail: info@kyokuto-bk.co.jp
〒530-0051 大阪市北区大崎南1-17 梅田アスカビル Tel: 06(6362)5515 FAX: (6362)8882
〒604-0985 京都市中京区錦町通丸太町下 井口ビル Tel: 075(231)2093 FAX: (231)3859
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴1-3-14 小穂ビル Tel: 092(751)6956 FAX: (741)0821

イタリアを旅する24章

内田俊秀 編著
イタリアにはどんな大都市でも小さな田舎町でも、特徴的な町並みや自然、歴史遺産、美術品、料理などの豊かな個性がある。長年この国と深く関わってきた著者たちがそんなユニークな町の数々とその素顔を紹介し、私たちを惹きつけてやまないこの国の魅力を綴る。

ロンドンを旅する60章

川成 洋、石原孝哉 編著
かつて世界の政治・経済の中心であり、今も多様な民族が集まり文化のモザイクをなす国際都市ロンドン。その多様性と多重性を、歴史、政治・経済、文化、芸術、文学、映画、スポーツ、ファッションから陰の一面に至るまで描き、ロンドンを読み解く旅に誘う。

パリ・フランスを知るための44章

梅本洋一、大里俊晴、木下長宏 編著
パリを舞台に世界の近現代史に圧倒的な影響を与えてきたフランス文化の魅力とは何か。文学から美術、音楽、スポーツ。料理まで、その多様な姿を著者たちの体験を交え読み解く。読者の知的好奇心を満足させる一冊。

ニューヨークからアメリカを知るための76章

越智道雄 編著
幾多の民族集団がしのぎを削って新しい文化を創造し、世界経済をリードしてきたニューヨーク。この都市の歴史と現在を知られば移民の国アメリカを覇権国家へと押し上げたダイナミズムがよくわかる。

カナダを旅する37章

飯野正子、竹中 豊 編著
ありきたりな入門書や旅行ガイドに飽き足りないひとのために、より深く刺激的なカナダを紹介する「知的な」旅ガイド。カナダ研究の第一線で活躍する著者が、広大な大地を舞台に、多種多様な人々の織りなす歴史、地域、社会、文化・芸術を体験を交えながら、紹介する。

世界の教科書シリーズ

フランスの歴史 [近現代史]

フランス高校歴史教科書(19世紀中頃から現代まで)
マリエル・シュヴァリエ、ギヨーム・フレル 監修
福井憲彦 監訳 遠藤ゆかり、藤田真利子 訳
◎定価9975円(本体9500円+税)

世界史のなかのフィンランドの歴史

フィンランド中学校近現代史教科書
ハハリ・リントアアホ、マルヤーナ・ニエミ、パイヴィ・シルタラ=ケイナネン、オッリ・レヒトネン 著 百瀬 宏 監訳 石野裕子、高瀬 愛 訳
◎定価6090円(本体5800円+税)

イギリスの歴史 [帝国の衝撃]

イギリス中学校歴史教科書
ミカエル・ライリー、ジェイミー・パイロン、クリストファー・カルピン 著 前川一郎 訳
◎定価2520円(本体2400円+税)

ロシアの歴史 [下巻]

ロシア中学・高校歴史教科書 ◎定価各7140円(本体各6800円+税)

【上】古代から19世紀前半まで

アレクサンドル・ダニロフ、リュドミラ・コスリナ 著 吉田衆一、アンドレイ・クラフツェヴィチ 監修

【下】19世紀後半から現代まで

アレクサンドル・ダニロフ、リュドミラ・コスリナ、ミハイル・プラント 著 吉田衆一、アンドレイ・クラフツェヴィチ 監修

〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5
明石書店 TEL 03-5818-1171 FAX 03-5818-1174
http://www.akashi.co.jp 振替口座00100-7-24505 *図書目録送呈

近世イングランドの年季奉公人

出自の社会経済史研究

石井健著 一七世紀、イングランドからアメリカへ年季奉公人として渡った移住者に焦点を当て、その出自について実証的に論及、通説が看過してきた同時代文献の史料評価を徹底し、地域史の手法と様々な史料を駆使し、従来とは異なる年季奉公人像を提示する。54600円

▼問題の所在/年季奉公契約書と年季奉公人/同時代文献の奉公人像・ホイットスライ「西インド遠征日誌」/地域社会の構造/地域社会と移住/新聞のなかのアメリカ像



【学術振興会助成】

「反抗者」の肖像

イギリス、インド、日本の近代化言説形成に編成
伊勢芳夫著/マムノール・ラハマン(研究協力・執筆)一九世紀イギリスの「近代化言説」の威威の中で様々な「反抗者」の抗うインドと日本の姿を文化論的方法で再現する。84000円

▼序論/「東洋」の知識化の理論的考察/「東洋」の知識化の歴史的考察(1)/「東洋」の知識化の歴史的考察(2)/揺らぐ語り/多層化する小説構造/近代化言説形成に編成の時代/結論



【学術振興会助成】

日英関係経営史

山内昌斗著 英国企業サミュエル商会、バブコック・アンド・ウィルコックス、ダンロップ、リーバ・ブラザーズの4社を主対象に、第二次大戦前の対日投資と経営の実態を検討する。36750円

紀元前四世紀ギリシア世界における傭兵の研究

小河浩著 紀元前四世紀ギリシア史における傭兵の諸問題と歴史的位置づけ、そしてそれらが古典期からヘレニズム記への移行において果たした独自の役割を考察する。52500円

アテナイの前411年の寡頭派政変と民主政

堀井健一著 テラメネスの政治行動に焦点をあてて古代民主政期アテナイの前四一年の四百人の寡頭派政変と5千人政権をアリストテレスの記述から再検討、再解釈を試みる。84000円

リチャード三世研究

尾野比左夫著 リチャード三世の伝説と実像/グロスター公リチャードと北部イングランド/グロスター公のクーデター/リチャード三世の治世/リチャード三世の統治、ほか。52500円

【表示価格税込】※ご注文は最寄りの書店または直接弊社へお願いいたします。【目録送呈】
書籍の詳しい情報はホームページで <http://www.keisui.co.jp>
〒101-0041 広島市中区小町1-4(〒730-0041) TEL (082)246-7909/FAX(082)246-7876 info@keisui.co.jp

関口武彦著 教皇改革の研究

新刊 定価一〇〇〇〇円
グレゴリウス改革と叙任権闘争を教皇改革の概念のもと統一的に把握。現代の教皇制の問題をも視野に入れた幅広いアプローチにより改革の全体像を浮き彫りにする。中世教会史学界に新たな問題を提示した研究。もカバーした、詳細な分析による記念碑的労作。

クリュニー修道制の研究

定価一〇〇〇〇円
クリュニー修道制の全史を、東方修道制と比較しつつ西欧の歴史の中に位置づける。特に修道院改革・教皇改革期、さらに十三世紀以降をもカバーした、詳細な分析による記念碑的労作。

文献解説 西洋近現代史

- 1 近世ヨーロッパの拡大 中野隆生 共編
林田伸一 合田昌史 野々瀬浩司 岩井淳 桜田美津夫 豊川浩一 川分圭子
- 2 近代世界の確立と展開 中野隆生 田中きく代 吉田正広 鍋谷都太郎 北村暁夫 豊川浩一 鈴木茂
- 3 現代の欧米世界 中野隆生 中嶋毅 鍋谷都太郎 北村暁夫 小野沢透 中田潤 岡部造史 鈴木茂

近代イギリスと会社法の発展

R・ハリス著 川分圭子訳
近代イギリスの会社組織と法体系の発展、経済との相関関係を英国史・法制史・経済史から多角的に分析する。 近刊

東京都千代田区西神田二一四一六
Tel (3261)7617 Fax (3261)7623
E-mail nanso@niji4u.or.jp



木版画を読む

占星術・「死の舞踏」そして宗教改革
『イソップ物語』から、占星術、「死の舞踏」、贖宥状批判、宗教改革運動に寄与した画家たち、さらに讃美歌まで、16世紀ドイツで流布された木版画の世界を丹念に読み解く。20年前の『ルター』の首引き猫』の続編。
森田安一著 四六判 予定368頁 予価3500円

子どもたちのフランス近現代史

フランス革命から第二次世界大戦まで、歴史のなかで子どもたちはどのように生き、死んだのであろうか。多様な「物語」や、自伝・回想などを通じて、近現代フランスの子どもたちの歴史をたどる。
天野知恵子著 四六判 204頁 2415円

歴史学のアポリア

ヨーロッパ近代社会史再読
アポリア(難問)に満ちた歴史学の可能性を求めて、戦後日本のヨーロッパ近代社会史研究を振り返り、今歴史学の存在理由を問う。
小田中直樹著 四六判 224頁 2835円

世界史リブレット

- 89 女と男と子どもの近代 長谷川まゆ帆著
- 116 産業革命 長谷川貴彦著

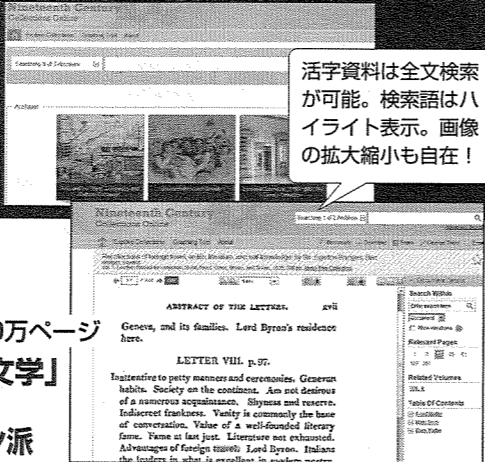
〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13 (価格税込) 電話 03-3293-8131 <http://www.yamakawa.co.jp/>
山川出版社

19世紀資料をデジタル化する待望のオンライン企画

オンライン版 「19世紀コレクション」 NCCO

Nineteenth Century Collections Online (NCCO)

書籍・新聞・定期刊行物・日記・書翰手稿・写真・パンフレット・地図、etc を収録



活字資料は全文検索が可能。検索語はハイライト表示。画像の拡大縮小も自在!

NCCOは主題別のアーカイブから構成されています

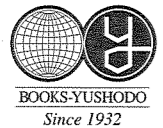
- Archive 1: 「英国の政治と社会」 約170万ページ
- Archive 2: 「西洋とアジアの外交・文化交流」 約200万ページ
- Archive 3: 「英国文化関連資料集成：演劇・音楽・文学」 約150万ページ
- Archive 4: 「コルヴァイ城所蔵 英国・ヨーロッパロマン派文学コレクション」 約520万ページ

今後も様々なアーカイブがリリース予定です。



雄松堂 NCCO

検索 詳細はこちら



株式会社 雄松堂書店

【無料トライアル受付中】

Home Page: www.yushodo.co.jp

本社: 〒160-0002 東京都新宿区坂町27 Tel: 03-3357-1411 Fax: 03-3356-8730 E-mail: sales@yushodo.co.jp
 京都: 〒604-8101 京都市中京区御池通柳馬場角 京都朝日ビルディング5F Tel: 075-222-0165 Fax: 075-256-2032

植民地独立の起源

池田亮著
 フランスのチュニジア・モロッコ政策、なぜフランスはどよりも早く植民地の独立を認め、ヨーロッパ帝国の解体を導いたのか。世界各国を巻き込んだ駆け引きの一部始終に迫る。 5880円

植民地の「フランス人」

松沼美穂著
 第三共和政期の国籍・市民権・参政権、民主主義と人権の共和国はいかにして植民地支配を正当化しえたのか。多様な現地住民を法的に包摂/排除したメカニズムに迫る画期的研究。 4410円

文化のハイブリディティ

P.パーク著/河野真太郎訳
 ヒト・モノ・情報、さらには宗教・文学・音楽・芸術など、さまざまなものの交流にもなう文化の遭遇、接触、交差、異種混雑性のプロセスを、歴史的な視野のもとに展望する。 2520円

文化史とは何か 「増補改訂版」

P.パーク著/長谷川貴彦訳
 文化史研究の第一人者が、英語圏だけでなく、ヨーロッパ、アジア、南北アメリカなど世界的規模で展開する研究を整理した格好の入門書。好評を得て版を重ねた原書第二版の完訳。 2940円

「ノヴェル」の考古学

伊藤著
 イギリス近代小説前史 諸ジャンルが内部で角逐・葛藤する十八世紀初頭の近代小説において、小説草創期の作家たちが置かれていた文学的ミリュールの「近似値」を復元する試み。 3885円

スペイン・イタリア紀行

A.ヤング著/宮崎揚弘訳
 《叢書・ユニベルシタス984》
 イギリスの著名な農学者アーサー・ヤングが綴った旅行記。彼の鋭い観察眼がとらえた十八世紀のスペイン・イタリアの自然景観、絵画芸術、建築物とはどのようなものだったのか。 2940円

法政大学出版局 〒102-0073 東京都千代田区九段北 4-3-24 ※表示価格は税込
 TEL 03-5214-5540 / FAX 03-5214-5542 http://www.h-up.com/

ヨーゼフ・ラスカと宝塚交響楽団
 根岸一美著 定価2100円

バルトークの民俗音楽編曲
 伊東信宏著 定価2940円

西洋文学 - 理解と鑑賞 -
 森岡裕一 編著 定価2205円

ああ、誰がシャガールを
 理解したでしょうか?
 関府寺司・樋上千寿・和田恵庭 著 定価2100円

ハンガリー語
 岡本真理 著 定価3150円

フランス児童文学のファンタジー
 石澤小枝子・高岡厚子・竹田順子 著 定価2310円

フランス表象文化史 美のモニュメント
 和田章男 著 定価2100円

ドイツ現代史探訪 社会・政治・経済
 鳩澤 歩 編著 定価2940円

ベルリン・歴史の旅 都市空間に刻まれた変容の歴史
 平田達治 著 定価2310円

叢書コンフリクトの人文学

1 コンフリクトから問う

その方法論的検討
 第I部 自然化されるコンフリクト
 第II部 国家と資本の問題
 第III部 日常への想像力
 富山一郎・田沼幸子 編 定価2625円

2 コンフリクトと移民

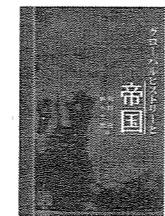
新しい研究の射程
 第I部 文化理論
 第II部 在日状況
 第III部 実践研究
 第IV部 研究への誘い
 池田光穂 編 定価2835円

3 競合するジャスティス

ローカリティ・伝統・ジェンダー
 第I部 再解釈される歴史
 第II部 再構成される価値
 第III部 挑戦される制度
 牟田和恵・平沢安政・石田慎一郎 編 定価2940円

4 コンフリクトのなかの芸術と表現

文化的ダイナミズムの地平
 第I部 地域とナショナルイデオロギ
 第II部 移動する芸術家、流通する芸術
 第III部 〈身体〉とアイデンティティ
 関府寺司・伊東信宏・三谷研爾 編 定価2940円



グローバルヒストリーと帝国

秋田 茂・桃木至朗 編
 大阪大学の5研究科共同のリーディング・リサーチ「歴史学方法論講義」のためのテキスト。グローバルヒストリーは国境と地域を越えて地球規模で展開する人類史の課題の考察であり、本書では広域支配を目指す「帝国」に焦点が絞られる。しかも、西欧中心史観を相対化するため、アメリカや西欧の帝国にとどまらず、モンゴル帝国や日本帝国も重要な柱になっている。 定価2205円

人文書院

〒612-8447 京都市伏見区竹田西内町9
 TEL 075-603-1344 FAX 075-603-1814

第一次世界大戦を考える (以下続刊)

- 好評既刊 各定価1,575円
- 小関 隆 徴兵制と良心的兵役拒否 —イギリスの第一次世界大戦経験
 - 岡田 暁生 「クラシック音楽はいつ終わったのか?」 —音楽史における第一次世界大戦の前後
 - 山室 信一 複合戦争と総力戦の断層 —日本にとっての第一次世界大戦
 - 藤原 辰史 カブラの冬 —第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆
 - 河本 真理 葛藤する形態 —第一次世界大戦と美術
 - 久保 昭博 表象の傷 —第一次世界大戦からみるフランス文学史

新刊
戦う女、戦えない女 林田 敏子
 総力戦は同時に女性の社会進出もおしひろげた。戦えない性である女性は、愛国心をどう示したのか。カーキユニフォーム、社会進出の象徴でもある制服への熱狂。大戦は女性をどう変えたのか。戦いのなかの女性を描き出す。 定価1680円

新刊
捕虜が働くとき 大津留 厚
 第一次世界大戦・総力戦の狭間で、膠着した戦いは、多くの捕虜を生み出し、戦争を続けるには、彼らの労働力もカウントされねばならなかった。捕虜たちは、何を感じ、何を食べ、どう働いたのか? それぞれの体験を通してみえてくるものを考える。 定価1680円

新刊
マンダラ国家から国民国家へ 早瀬 晋三
 東南アジア史のなかの第一次世界大戦

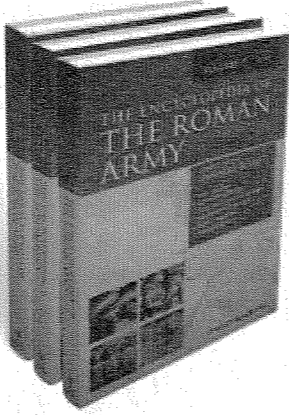
大阪大学出版会

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘2-7 大阪大学ウエストフロント
 Tel: 06-6877-1614 info@osaka-up.or.jp ※価格税込

初めての学術的「ローマ軍」百科事典！
世界史上、もっとも注目すべきローマ軍を古代初期、共和制、
元首政・帝政から古代末期にいたるまで網羅

古代ローマ軍百科事典 (全3巻) The Encyclopedia of the Roman Army

Edited by Yann Le Bohec (パリ第4大学・ソルボンヌ)
2013:10 3 vols. 1,176 p. set ISBN 978-1-4051-7619-4
USD 485.00 *年内刊行記念特価
Web 販売価格 * : ¥48,888 / 標準価格 : ¥61,110 (税込)
(Wiley-Blackwell) -US-



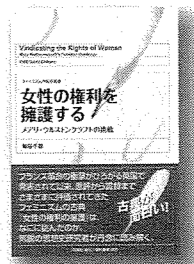
- ★ 各国の著名歴史学者、軍事史専門家が寄稿
- ★ 古代ローマ軍のすべてを全3巻で詳説。軍事教練、戦略、個々の戦闘、軍団、指揮官、軍隊生活と軍人の生涯、等、多彩なトピックス
- ★ 古代ローマの経済史、政治史、宗教史からローマ軍を分析

※ Web 販売価格 (税込) は、弊社インターネット書店 Kinokuniya BookWeb Pro (<https://pro.kinokuniya.co.jp>) でご注文され、付帯作業を伴わない納品を行い、弊社標準書式による請求書を発行し遅滞なくお支払いいただく場合、あるいは、クレジットカードまたは口座振替でお支払いいただく場合に適用される販売価格です。

(株)紀伊國屋書店 営業企画部 〒153-8504 東京都目黒区下目黒3-7-10 tel (03) 6910-0510 fax (03) 6420-1356

紀伊國屋書店

女性の権利を擁護する メアリ・ウルストンクラフトの挑戦



フランス革命の衝撃がひろがる英国で、保守陣営と果敢に論争する女性論客として一躍有名になったメアリ・ウルストンクラフト。彼女がわずか三カ月で書きあげた『女性の権利の擁護』は、フェミニズムの古典の筆頭にあげられる。フェミニズムという言葉すらなかった時代、ウルストンクラフトは何に挑んだのか。当時の議論に立ち返ってたんねんに読み解く。

大英帝国の女教師 イギリス女子教育と植民地



大英帝国の女性たちは一九世紀後半、フェミニズムを追い風に中・高等教育を獲得し、教師となつて、男子進学校と同等レベルの女性による女子教育という領域を切り開いた。さらに植民地拡張の潮流に乗って、単身海を渡つていく。二つの大戦期までの、教師という職業を開拓していった女教師たちの姿を追いながら、フェミニズムと女子教育、帝国主義の関係を探る。

変容するシテイズンシップ 境界をめぐる政治
本前利秋・亀山俊朗・時安邦治 編著
グローバリ化時代のキー概念となったシテイズンシップ。本書は、その定義と歴史から(市民と外国人)の問題、コスモポリタニズムの可能性、シテイズンシップ概念の再編まで、権利と義務の平等をめぐる諸問題を明らかにする。
定価2000円+税

葛藤するシテイズンシップ 権利と政治
本前利秋・時安邦治・亀山俊朗 編著
現代社会のさまざまな葛藤を、シテイズンシップ概念から捉え直す。
定価2100円+税

〒112-0014 東京都文京区関口1-29-6-202 発行 白澤社
tel: 03-5155-2615 / fax: 03-5155-2616 e-mail: hakutaku@nifty.com
(発売:現代書館)

近代ヨーロッパ大学史 啓蒙期から1914年まで

R・D・アンダーソン著 / 安原義仁・橋本伸也監訳 6300円
英・独・仏、東中欧からロシアに至るヨーロッパの大学を扱う概説書

世代の歴史社会学 近代ドイツの教養・福祉・戦争

ライフステーグとしての世代論と、特定年出生者としての世代論の混乱を整理し、あらためて時代の特色について語るべき問題を示す
村上宏昭著 5775円

近代を創ったスコットランド人

啓蒙思想のグローバルな展開
「ある啓蒙の生涯をスコットランド的精神にしほり、今日までの歩みについて読み解く」
アーサー・ハーマン著 / 篠原 久監訳・守田道夫訳 5040円

ヘンリ8世の迷宮 イギリスのルネサンス君主

「青ひげ」のモデルとなったヘンリ8世はいかなる王だったか? 暴君あるいはルネサンス君主——ヘンリ8世という名の迷宮にようこそ——
指 昭博編 2730円

古都エディンバラ奇人伝

ジョン・ケイが描いたスコットランド啓蒙の時代
十八世紀スコットランド啓蒙の時代、銅版画家ジョン・ケイが古都エディンバラに暮らした人々の姿をカリカチュアとして描き、今に伝える
服部昭郎著 4935円

ハプスブルク史研究入門

歴史のラビリンスへの招待
大津留厚・水野博子・河野淳・岩崎周一編 2940円
ヨーロッパ史の裏側には何が横たわっているのか。ハプスブルク史の全貌に迫る

ビザンツ 交流と共生の千年帝国

これまで光の当たらなかったビザンツ帝国の「境界」域から、帝国存続の鍵を見出す
井上浩一・根津由喜夫編 4935円

近代国家形成期の教育改革

バイエルンの事例にみる
谷口健治著 5250円

ドイツ史と戦争 「軍事史」と「戦争史」

三宅正樹・石津朋之・新谷卓・中島浩貴・大井知範編著
ドイツ史を通して、社会の変化と戦争の様相。の関係性を探る論集。独の各国への影響。A5判 3800円+税

フォルクと帝国創設 19世紀ドイツにおける

小原淳著
運動の担い手であったフォルクの実像を求め、様々な動向とその変容、「上/下」「内/外」の関係における国民化、帝国創設の相貌。A5判 3000円+税

国王カール対大天使ミカエル軍団

ルーマニアの政治
宗教と政治暴力
藤嶋亮著
戦間期ヨーロッパにおける最も暴力的な運動と最も赤裸な独裁が対峙したルーマニアのダイナミックな政治的・社会的関係を解明。A5判 4800円+税

ロシアの結婚儀礼 家族・共同体・国家

伊賀上菜穂著
19世紀末から20世紀にかけての農村ロシア人の結婚儀礼の姿を読み解き、その変遷を通して見るロシア社会・文化の底流。A5判 5000円+税

ヴォルガのドイツ人女性アンナ

鈴木健夫著
19世紀末にヴォルガ地方のドイツ人移民の裕福な農家に生まれた女性の社絶な生き方を通して見る忘れてはならないロシアの歴史。四六判 1600円+税

集いと娯楽の近代スペイン セビリアのソシアリティア空間

A・G・トゥロヤノ他著 / 岡住正秀 皇中昌教、椎名浩、辻博子訳
アンデルシアの特異な人間関係と共生の多様な文化と形に光を当てる! A5判 2800円+税

国際関係論と歴史学の間で 斎藤孝の人と学問

山極晃、河合秀和、百瀬安編
世界認識への複眼的方法で国際関係論と歴史学の架橋に努めた齋藤孝の歩みを追った特異な「遺稿・追悼集」。四六判 2800円+税

変貌する権力政治と抵抗 国際関係学における地域

百瀬宏編著
菅原淳子、大庭千恵子、志摩園子、大島美穂著
近代国家の権力政治と抵抗する非国家レベルのつばぜり合いの諸相。A5判 2800円+税

デンマーク国民をつくった歴史教科書

ニコリーネ・マリイ・ヘルムス著 / 村井誠人、大澤太郎訳
北欧の王国・デンマークの国民史をデンマーク人自身はどのように語ったのか! A5判 3200円+税

彩流社 〒102-0071 東京都千代田区富士見2-2-2 Tel 03 (3234) 5931 Fax 03 (3234) 5932
URL <http://www.sairyusha.co.jp> e-mail sairyusha@sairyusha.co.jp 【内容の詳細はHPで】

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前 昭和堂 郵便振替 01060-5-9347 *定価は税5%込み価格
TEL 075-706-8818 FAX 075-706-8878 <http://www.showado-kyoto.jp>

ルネサンス人物列伝



高山宏氏推薦！途方もない時代に生きた、途方もない94名の生涯

〔著〕R・ナイヴィス他 訳 和泉香 9975円

聖界・俗界を問わず、教皇や王侯貴族、思想家や美術家・音楽家、商人や職人、はては名うての盗賊まで。近代への口は華開いた個性きわだつた人生の物語を華麗な図版と共に。

ルネサンス人物列伝

〔編〕ブシヤード 〔日本語版監修〕堀越孝一 9975円

ルネサンス人物列伝

〔著〕堀越孝一 3150円

汚辱と汚臭に満ちた時代を再現した古典的名著。

ルネサンス人物列伝

〔著〕A・フランクリン 訳 高橋清徳 2310円

百貨店とオートクチュールへの道を開いた活動の美徳とは

ルネサンス人物列伝

〔著〕1760-1830 〔著〕角田宗彦 5040円

身体文化史の視点からみた、アンシャンレジーム期の服飾

ルネサンス人物列伝

〔著〕内村理奈 3060円

ホイジンガも参照した西洋中世の色彩論の原典、待望の邦訳

ルネサンス人物列伝

〔著〕シンシル 訳 解説 伊藤聖紀・徳井敬子 2100円

19世紀イタリヤ朝の下層階級、都市生活者の暮らしを語る

ルネサンス人物列伝

〔著〕ヘンリー・メイヒュー 訳 植松靖夫 2730円



〒113-0033 東京都文京区本郷2-35-21-302 TEL03-3812-6504 FAX03-3812-7504

悠書館 www.yushokan.co.jp/ *価格税込・内容見本進呈

西洋の歴史を読み解く

上田耕造・入江幸二・比佐篤・梁川洋子 編著 A5判◆二二〇五円
歴史に名を残した者たちが、どのような時代背景のもとで登場し、彼らが活躍した時代にどのような影響をもたらしたのかを「人物と時代」「テーマ史」の二つのトピックから考察する。

緑の党政権の誕生

保坂 稔 著 A5判◆三三六〇円
「価値的保守」とは何か。〇数回の渡独、八年にわたる党関係者やS21反対運動参加者への延べ三〇〇名を超えるインタビュー調査をふまえ、ドイツの環境運動、環境政策の最新動向を探る。

西洋哲学の軌跡

三崎和志・水野邦彦 編 A5判◆二八三五円
個人の自覚と文化の合理化と経済の市場化がすすむ近代社会のなかで、西洋の哲学者たちはそれぞれに「人間―世界関係」を論じてきた。本書では、近代以降の哲学者たちの理論を今日の私たちの立場で把握することを試みる。

エレメンタル欧米経済史

馬場哲・山本通・廣田功・須藤功 著 A5判◆二九四〇円
近代資本主義がいち早く、ものとも典型的に発展したヨーロッパ諸国とアメリカ合衆国の経済史を、最新の研究成果を踏まえて中世から現代までバランスよくコンパクトに集約。

E・M・フォースターの謎

岡山勇一 著 A5判◆三二五〇円
フォースターがなぜ小説を書かなくなったのかその理由を明らかにするとともに、彼が残した六作品およびその他の著作の内容を分析して、フォースターの文学と彼の思想を追求する。

アンドレ・マルロー美術史論研究

森脇善明 著 A5判◆三六七五円
小説「征服者」「人間の条件」等の作家であり、戦後フランスのド・ゴール政権時代の閣僚でもあったマルローが、政治家引退後の生涯の後半生を投入してまとめあげた美術史論の本質に迫る。

ドナウ河

丹下和彦・松村國隆 編著 A5判◆二六二五円
ヨーロッパを東西に流れる国際河川ドナウ河。源流から河口まで、古代から現代まで、時空を超えた旅を通して流域のさまざまな文化の魅力に迫る。

晃洋書房 〒615-0026 京都市右京区西院北矢掛町7 ※価格は税込です。
電話 075-312-0788 FAX 075-312-7447

身分社会と市民社会

一九世紀ハンガリー社会史
ケヴェール・シエルシ／平田武訳 人間科学叢書45
ハンガリーの社会史研究を代表する著者による、最新の成果。フダベント大学の少ガリ近現代社会史講義 A5上製 三五〇頁 四八八三〇

中世ブリテン諸島史研究

ネイション意識の諸相
有光秀行著 ノルマン・コンクエストから13世紀まで、イングランドと周縁世界の歴史の展開を解明 A5箱 二九〇頁 六八八五

中世のセルビアとボスニアにおける君主と社会

唐澤晃 著 両国の王権と貴族層の権力関係や支配層の統治理念を分析、西欧諸国との共通点・相違点を解明 A5箱 三三八頁 六八八五

一八世紀イギリスの都市空間を探る

「都市ルネサンス」論再考
中野忠・道重一郎・唐澤達之 編 A5上製 三〇〇頁 五五二〇

戦争の記憶とイギリス帝国

オーストラリアカナダにおける植民地ナショナルリズム
津田博司 著 A5上製 二〇〇頁 五五一四五

もう一つのスイス史

独語圏・仏語圏の深い溝 刀水歴史全書83
クリストフ・ビュヒ／片山淳子訳 四六上製 二五〇頁 五二六二五

ドイツの歴史百話

刀水歴史全書84
坂井築八郎 著 四六上製 三三〇頁 五二五〇

十字軍の歴史

刀水歴史全書86
A・ジョージ・ニコル／森田安一訳 初めての本格的通史。戦いは繰返し失敗したのに、懲りずに続いた十字軍の魅力が明かされる。 四六上製 四五〇頁 予価四〇九五

魔女と魔女狩り

刀水歴史全書87
W・ベリンガー／長谷川直子訳 魔女や魔女狩りは人類の歴史の中で未だ終わってはいない！ 最近の研究に基づく新しい魔女論！ 四六上製 四〇〇頁 予価四〇九五

ハプスブルク帝国の鉄道と汽船

佐々木洋子 著 新しいテクノロジーは19世紀オーストリアをどのように変えたか。人々の時間・空間意識の変容を読み解く。 A5上製 二八〇頁 予価五二五〇

新しい時代の歴史101冊

世界史の鏡 榊山紘一編 各四六並製 一六〇頁 一六八〇

神聖ローマ帝国

ドイツ王が支配した帝国
池谷文夫 著 (国家7)

国民国家 構築と正統化

政治的なものの歴史社会学のために 四六判220頁 2310円
イヴ・デロワ著／中野裕二(駒澤大学教授)監訳、稲永祐介・小山晶子訳
歴史学と社会学の断絶から交差へと至る過程を理論的に跡づけ、近代国家形成、国民構築、投票の意味変化について分析。政治社会学の再建！

グラッドストーン

政治における使命感
神川信彦 著、君塚直隆(関東学院大学教授)解説 四六判508頁 4200円
1967年毎日出版文化賞受賞作に、気鋭の英国史家の「解題」を付して復刊。

現代ドイツ政党政治の変容

社会民主党、緑の党、左翼党の挑戦
小野一(工学院大学准教授) 著 四六判216頁 1995円
2005年のシュレーダー「赤緑」政権退陣後の政治的再編の動きを追いながら、左翼陣営の政治変化を分析。緑の党については、結党からの歴史の経緯も紹介。

フランス緑の党とニュー・ポリテイクス

近代社会を超えて緑の社会へ
畑山敏夫(佐賀大学教授) 著 A5判252頁 2520円
1984年に登場したフランス緑の党。その起源から、国政参入までのプロセス、現実政治へのコミットメントなどを実証的に分析。

日本政治史の新地平

坂本一登・五百旗頭薫 編著 A5判621頁 6300円
気鋭の研究者による16論文所収。執筆 坂本一登、五百旗頭薫、塩出浩之、西川誠、浅沼かおり、千葉功、清水唯一朗、村井良太、武田知己、村井哲也、黒澤良、河野康子、松本洋幸、中静未知、土田宏成、佐道明広

ノーベル文学賞

「文芸共和国」をめざして
柏倉康夫(放送大学名誉教授) 著 四六判342頁 2310円
1901年受賞のプリュドムから2011年度受賞のトランストロメルまで計108名。文学の歴史に名を刻す巨人とその時代を辿る。巻末には、受賞者と作品一覧を掲載。

吉田書店 102-0072 東京都千代田区飯田橋1-6-4 幸洋アネックスビル3F (価格は税込)
TEL:03-6272-9172 FAX:03-6272-9173 http://www.yoshidapublishing.com/

【価格は税込】 千代田区西神田2-4-1 東方学会本館 tel. 03-3261-6190 fax. 03-3261-2234
〒101-0065 刀水書房 http://www.tousuishobou.com

ルネサンス三大巨匠と出会う!

芸術の都
パリ大図鑑
建築・美術・デザイン・歴史
モンクロ/著 三宅理一/監訳

▶オールカラー 712頁
豪華装幀版
B4変型 ●7140円

レミゼラブルの舞台がわかる
古代から現代まで、
二千年の芸術文化を
網羅した決定版!

初版から100年めの金字塔
先史時代から20世紀まで、
世界的なボリュウムの写真とイラスト。●69400円

世界建築の歴史
大辞典
建築・美術
デザインの交差

クリックマン/著
飯田西郎/監訳

ラファエロ
天使に愛された画家
さまざまな画家や芸術家に出会い、
才能を開花させたラファエロを人気
イラストレーター、ランドマンが描く。

アートな絵本 シリーズ 最新刊!!
国立西洋美術館長
青柳正規 監訳
ランドマン 絵
チンフエツティ 文
B4変型 ●1890円

天才の素描と手稿
P.テ.ウエツキ 著
森田義之 訳
B4変型 ●336頁 ●3990円

レオナルド・ダ・ヴィンチ
天才の思考過程の秘密、大公開!
アンナ・スー 編 森田義之 監訳

光と影、地図、人体解剖、兵器の
発明、実験の記録、アイデア等を
まとめた直筆ノート!
B4変型 ●336頁 ●3990円

ミケランジェロ
ミケランジェロの生涯を概説するとともに主要な作品を中心に
他の作家の作品なども交えて解説。
A4・176頁 ●3780円

天才の素描と手稿
P.テ.ウエツキ 著
森田義之 訳
B4変型 ●336頁 ●3990円

西村書店 102-0071 東京都千代田区富士見2-4-6
TEL 03-3239-7671 FAX 03-3239-7622 [価格は税込]

丸善・ユーリカプレス
共同企画

編集および日本語解説 大石和欣(名古屋大学)・出島有紀子(桜美林大学)

ナショナル・トラスト創設関連文献復刻集成
全5巻+和文解説

Foundations of the National Trust
Lives and Works of Octavia Hill, Robert Hunter and H.D. Rawnsley
Edited by Kazuyoshi Oishi and Yukiko Dejima

本叢書は、社会改革者オクタヴィア・ヒル女史(1838-1912)、弁護士ロバート・ハンター
卿(1844-1913)、聖職者ハードウィック・ローンズリー師(1851-1920)という、トラストの創立
者たちが残した代表的な著作や書簡、および各人の生涯を描いた伝記を集成する初の復
刻コレクションです。 発売中・セット税込価 134,400円

EPM, JPN / 日本総代理店: 丸善

MARUZEN 丸善株式会社 学術情報ソリューション事業部 商品センター
〒105-0022 東京都港区海岸1-9-18 国際浜松町ビル

CLIO
vol.27

石井規衛教授 退官記念インタビュー

論文

柏達己 「前4世紀アテナイにおける archai の定義について
—Aischin. 3. 13-15, 28-30の解釈を中心に—」

中川友喜 「12・13世紀スコットランドのストラサーン伯による伯領外民の受容」

長野壮一 「19世紀前半パリにおけるセルクル
—M・アギュロンによる「ブルジョワの社交関係」概念の再検討—」

特別寄稿

M・G・ムツアレツリ、藤崎衛訳「ポローニヤのゲッター」

定価 1,000円

クリオの会 〒113-0033 東京都文京区7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科
西洋史学研究室内 Tel:(03)5841-3789 Email:clionokai@gmail.com

プッツガー歴史地図

【書名】プッツガー歴史地図 日本語版 【定価】9,975円(本体9,500円) 【ISBN】978-4-8071-6099-0
【装丁】ハードカバー 【頁数】312頁 【判型】B4変型判 ※原書と同じ **好評発売中**

PUTZGER Historischer Weltatlas とは...

1877年の創刊より、104もの版を重ねた権威ある
ドイツの世界歴史地図。世界史の詳細な地図が満載!

PUTZGER
-Historischer Weltatlas-
日本語版を発売!

帝国書院 開発部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29
TEL.03-3261-9038 FAX.03-3234-7002 http://www.teikokushoin.co.jp

世界を知る、日本を知る、人間を知る——専門研究の枠組みを越えて、歴史学の最前線と面白さを平易な言葉とビジュアルで伝える新しい世界史叢書。

〈創元世界史ライブラリー〉

ハンザ「同盟」の歴史

——中世ヨーロッパの都市と商業

高橋理著 四六判 300頁 2,310円



世界史上最大の都市連合体はいかにして独立性を保ちつつ、ヨーロッパ北部の経済活動を支配するに至ったのか。ハンザ商業展開の前夜から説き起こし、盟主リュベクを中心にやがて絶頂を迎えるハンザ諸都市の興隆、その終焉までの数百年間の歴史をみる。ハンザ史研究の泰斗による好個の通史。

2月新刊

近代ヨーロッパの形成

——商人と国家の近代世界システム

玉木俊明著 四六判 256頁 2,100円

アントウェルペンを中心とする商人ネットワークの拡大、産業革命、財政 = 軍事国家など種々のテーマを関連づけ、近世の経済発展から主権国家の誕生までを多面的に論じる。

【続刊予定】

- 「鉄道」の誕生——鉄道の拡大がもたらしたもの 湯沢威著
- フリードリヒ大王——正義と祖国愛 屋敷二郎著
- イスラーム科学の歴史——バグダードからヨーロッパへ 山本啓二著
- 七年戦争——史上初の世界戦争とヨーロッパ近代 阪口修平著
- ヴェネツィアの歴史——海と陸の共和国 中平希著
- グスタフ・アドルフ——スウェーデン大國時代とバルト海支配 根本聡著
- 「イタリア」の誕生——ナポレオンがつくったイタリア 森口京子著

第二次世界大戦秘録 幻の作戦・兵器 1939-45

M・ケリガン著/石津朋之監訳/餅井雅大訳 246×197mm 2,520円

近年公開された機密文書を含む膨大な史料を繙き、英独米日を中心に各国の作戦・兵器の全容から戦争の舞台裏まで丹念に解説、知られざる真相を明らかにする。



12月新刊

武器の歴史大図鑑

R・ホームズ編/五百旗頭真、山口昇監修 307×258mm 360頁 12,600円

歴史と軍隊——軍事史の新しい地平

阪口修平編著 A5判 344頁 3,150円

19世紀ドイツの軍隊・国家・社会

R. プレーヴェ著/阪口修平監訳/丸島宏太、鈴木直志訳 四六判 256頁 3,150円

「知の再発見」双書 〈絵で読む世界文化史〉

歴史・考古学・美術・音楽・科学など、人類の「知」の歴史を美しいカラー図版で読み解く人気シリーズ。既刊 154点、続々刊行中。B6判変型 144～236頁 1,470～1,680円

- 158 モン・サン・ミシェル 奇跡の巡礼地 J=P・ブリゲリ著/池上俊一監修
- 157 フラ・アンジェリコ 天使が描いた「光の絵画」 N・ローレ著/森田義之監修
- 156 ドガ 踊り子の画家 H・ロワレット著/千足伸行監修
- 155 シトー会 L・プレスイール著/杉崎泰一郎監修

戦闘技術の歴史4 ナポレオンの時代編 AD1792-AD1815

R・B・ブルースほか著/浅野明監修 A5判 380頁 4,725円

歩兵の役割、騎兵の活躍、指揮系統の発展、火砲と攻囲戦の進化、主要な海戦など戦闘場面の実際を豊富な図版で詳しく解説。他書の追従をゆるさない大好評シリーズ第4弾。



4月新刊

【好評既刊】

- 戦闘技術の歴史1 古代編 3000BC-AD500 S・アングリムほか著/松原俊文監修 A5判 404頁 4,725円
- 戦闘技術の歴史2 中世編 AD500-AD1500 M・ベネットほか著/浅野明監修 A5判 368頁 4,725円
- 戦闘技術の歴史3 近世編 AD1500-AD1763 C・ヨルゲンセンほか著/浅野明監修 A5判 384頁 4,725円

地図で読むケルト世界の歴史

I・バーズ著/鶴岡真弓監修/桜内篤子訳 336×255mm 400頁 8,400円

ケルトの人々の分布と文化、移動や種々の争闘を示す 142 葉の地図と 146 項目の解説により、ケルトの歴史の全体像を提示。



5月新刊

中世英仏関係史 1066-1500

——ノルマン征服から百年戦争終結まで

朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編著 A5判 344頁 2,940円 一国完結史観、国民国家史観の陥穽を避け、ノルマン征服以降の英仏の内部構造の形成過程を、時々の英仏関係や周辺地域との関係から考察、新しい英仏史像を描く。

◆多才な哲学者の四半世紀の活動を一望する

知の歴史学

イアン・ハッキング 出口康夫、大西琢朗、渡辺一弘訳

概念分析とフリーコー流の知の考古学とを織り合わせ、哲学の潮流を変えてきた著者の多彩な活動を一望。 四六判 定価4,935円

◆注目を浴びる新たな歴史学の潮流への入門書

グロイバル・ヒストリーとは何か

パミラ・カイル・クロスリー/佐藤彰一訳 四六判 定価2,730円

従来の歴史研究と方法的にどう異なるのか。いかなる理論とナラティブを特徴とするのか。注目を浴びる新たな歴史学の潮流への入門書。

◆狂信と軽信におおわれた21世紀への警鐘！

歴史が後ずさりするとき

——熱い戦争とメデア

ウンベルト・エーコ/リツカルド・アマデイ訳 四六判 定価3,045円 政治とメデアの現実を鋭く批判する評論集。狂信と軽信におおわれた歴史があたかも後ずさりし始めたかに見える21世紀への警鐘。

◆文学史に新たな展望を切りひらく

〈徒弟〉たちのイギリス文学

原英一 小説はいかに誕生したか 四六判 定価3,895円

自己の欲望と文明社会の律するシステムとに挟まれた「徒弟」たちの抱えた葛藤のドラマ。文学史に新たな展望を切りひらく意欲作。

◆オーリウのテクストから憲法学の原理的考察へ

制度と自由

——モリス・オーリウによる修道会教育規制法律批判をめぐって

小島慎司 約一〇〇年前、フランス公法学の泰斗オーリウは修道会教育を禁止する法律を批判した。その前提に置かれていた国家論を探究する。 A5判 定価7,245円

岩波書店 〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 http://www.iwanami.co.jp/

[定価は消費税5%込み]

〒541-0047 大阪市中央区淡路町 4-3-6 Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111

創元社

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂 4-3 煉瓦塔ビル Tel.03-3269-1051 〈価格は税込〉

英領インドと女性

18～20世紀初頭の一次史資料集成 全5巻

Women in Colonial India: Historical Documents and Sources

【編集&解説】 Pramod K. Nayar, *University of Hyderabad, India*

2013年9月刊行予定 総約2,000頁 本体セット予価¥128,000- (税込¥134,400-) ISBN: 978-4-86166-179-2

英国の支配が強まった18世紀から大英帝国のなかで植民地化の進む19世紀のインドには、数多くの英国人女性が滞在します。外交官、商人の妻として同地に居住または旅する女性、宣教、教育、医療などの職業に携わり、インドに新たな世界を求め移住する者、その目的は様々ですが、既に女性教育が進み知的水準も高かったこれらの女性の多くは、近代的な女性の意識で植民地インドにおける女性の諸問題に関わり、新聞・雑誌等のメディアで報告や問題提起を行います。本書はこれら同時代の文献約180点の史資料を集め復刻するもので、英国や植民地インドで刊行された英文資料を中心に、雑誌、新聞、パンフレットなどの記事を各巻テーマ別に編集、編者の解説を付します。

教育、健康、結婚といった一般的なテーマと合わせ、女児殺し (Female infanticide)、サティー (寡婦焚死) といったインドにおけるジェンダーの問題に真っ向から取り組んだ多数の文献も収録、女性の著述と同時にに関する男性側からの主張も併録し、この時代のインドの女性問題の全体像を俯瞰できるよう配慮しています。

【各巻収録テーマ】 Volume 1: The Woman Question / Volume 2: Female Infanticide /
Volume 3: Sati / Volume 4: Education / Volume 5: Health and Marriage

帝国史のなかの子ども

19世紀～20世紀初頭の史資料復刻集成 全4巻

Children and Empire

【編集&解説】

Cheryl M. Cassidy & Andrea Kaston-Tange, *Eastern Michigan University, USA*

2012年12月刊行 総約1,600頁 本体セット価¥88,000- (税込¥92,400-)

ISBN 978-4-86166-176-1

- 英米を中心に子どもと帝国主義に関わる多様な史資料180点弱を復刻収録
- 子どものありかたが大きく変わった19世紀における、国家の理想とする子ども像や国家間の差違、身体、育児、教育、道徳、遊び、労働、移民、キリスト教宣教など多様な問題に同時代の文献でせまる画期的資料集
- 同時代の新聞・雑誌記事、書籍からの抜粋に加え広告、写真図版も多数掲載。編者による詳細な解題付



女性と大英帝国：18世紀初頭～20世紀初頭の一次資料集成 全5巻

Women and Empire, 1750-1939: Primary Sources on Gender and Anglo-Imperialism

2009年2月刊行 総約2,000頁 本体セット価¥98,000- (税込¥102,900-) ISBN 978-4-901481-95-3

- 対象地域● 第1巻：オーストラリア (111文献) / 第2巻：ニュージーランド (83文献) /
第3巻：アフリカ (72文献) / 第4巻：インド (31文献) / 第5巻：カナダ (39文献)

Edition Synapse 〒101-0047 東京都千代田区内神田 2-8-5

Tel: 03(5296)9186 Fax: 03(3252)1822 <http://www.aplink.co.jp/synapse> 【カタログ呈】